

家庭・保育所・幼稚園

1124
70021

幼児の教育

第七十卷 第七号



7

日本幼稚園協会

紙の造形指導の決定版!!

幼児の造形〈紙〉



藤田復生 著 木村恵一 写真

A 5判 224ページ……(カラー 16ページ
図入り解説112ページ・2色刷 96ページ)

定価 1,000円 千90円

幼児とともに20数年間、造形活動を続けてきた著者が、たゆまぬ研究と努力によって体系づけた、毎日の保育に直結するユニークな造形指導書です。幼児教育にたずさわっておられる方、これから幼児教育者になられる方に、おすすめします。

これまで、幼児の紙の造形は、一般に興味の中心、素材の経験、技術の習得などによって、教材が与えられてきたように思います。これらも大切なことではありますが、より創造的な活動は、発展の過程と系統性を、考えてみなければならないように思います。

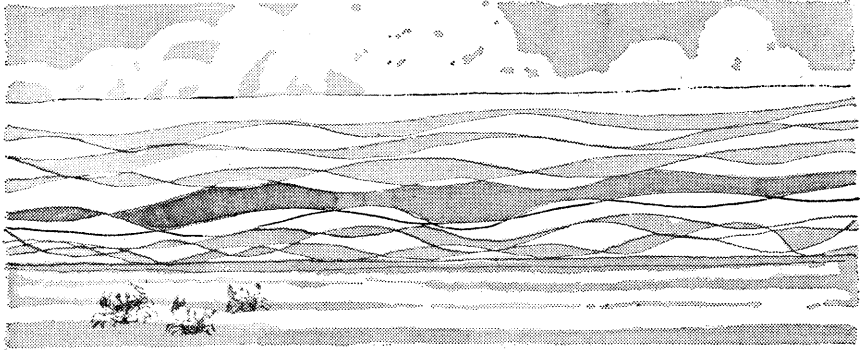
(著者まえがきより)

株式会社 フレーベル館

幼児の教育

第七十卷 第七号





幼児の教育 目次

第七十卷 七月号

表紙 小野木 学
カット 斎藤 信也

★講演

保育の構造……………津守 真(4)

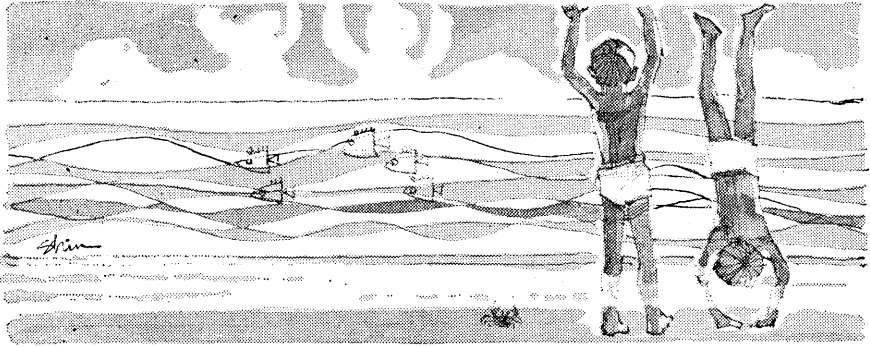
遊びの空間……………飯沼 佳子(12)

時間と空間……………神山 雅英(18)

★ユートピア

かけ足のヨーロッパ見学……………竹中 京子(22)

五歳児を卒園させて……………青木 秀子(26)



日本は間違った方向へ歩んでいる……………羽田令子:(33)

★こんな本・あんな本……………菊池百合:(38)

子どもの生きがい……………畠中徳子:(40)

特殊幼児の保育……………河井祥子:(44)

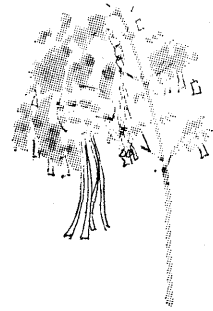
保育者養成の一試案……………武井幸子:(52)

都市化と幼児(4)

遊び場のあり方……………塩川寿平:(59)

編集委員・周郷博・守永英子
 編集主任・津守真・赤間峰子
 本田和子・青木秀子

保育の構造



津 守 真

保育の構造について

きょうは「保育の構造」という題をつけてみました。が、構造などといえますと論理的に組み合わせた立派な建物のようなことを連想しがちです。保育の場合では、人間と人間の集まりのことがらですから、一体、そういう人間の集まりに構造というようなものがあるのかどうか、という風な疑問がもたれます。そういうことを承知の上で、あえて考えてみようというのです。

人間は、人によくわかるようにはっきりとした面を出しますと、外から見た時、はっきりしていればいるだけ、内側は混んとしたものであり無秩序なものであるという、そういう二面性をもっている。ですから、はっきりわかるように私がお話をお話

したとすれば、本当は、はっきり割りきれないものを、むりに割りきってしまうことになりかねません。また、保育のことがらというものは、はっきり割り切れないものがたくさん中に含まれているところこそ、特色があるともいえましょう。

子どもとふれて、子どもにどうすればいいかということを考え、子どもにも何を与えねばならないかを考えるのは、私どもが、何かがすっかりわかっている、それに子どもを当てはめていくという作業ではないはず。それとは逆の発想をするものであると思います。子どもの世界、およびそこに参加するおとなを含めた保育の世界というのは、わからないものをたくさんもち、謎に包まれたものであり、その中にはすばらしい思想や芸術がいっぱい含まれているようなものじゃないかと考えています。

その一つをめぐってみると、その中によいものがたくさんかくされている、あるいは混とんとしたものの中に何かを発見するというような作業、それが保育である。丁度、土の中にダイヤモンドや金鉱がかくされていて、それを掘り当てるのにシャベルで掘り返すような、あるいは、考古学の資料がたくさん土の中にかくされていてそれを掘り返すような、そういうのが保育の仕事だとすれば、乱暴に掘り返したら、そういう材料はこわれてしまうかもしれない。丁寧に一枚一枚掘り返して、愛情をもってソッと掘り起こして、はじめて見つかるものがある。また、あるところは、大ざっぱに掘り起こしてあるところまで進んでいかないと、その下の鉱脈にいき当たらない場合もある。

何か、我々がわかっていてそれを当てるのが保育ではなくて、人間のわからないものの中に新しいものを、あるいはそこにあるよいものを見つけていこうというのが保育だという風に考えますと、一つ一つの保育の場面というのは、一回一回が新しく、また、一回一回が新たなものを発見する人間の働きだということができます。

こう考えてきますと、保育の構造なんていうことを考えるのは、とても大それたことで人間の手にはおえないようなしろものである、といった方がよいような気もいたしますが、それでも、あえて、もう少し進んでみます。

保育構造の底辺はなにか

人間の子どもを相手にして、人間であるところの保育者が、そこでいっしょにふれ合って生活をして作り上げていく、その人間の働きにはいろいろな部分を考えてみることがができます。いろいろの部分といっても、それはお互いに関連し合う部分ですけれども、頭の中で考える働き、目で見たり耳で聞いたりする働き、手でさわったりにおいをかいだりする働き、またからだを動かし自分であちこち移動する働き、こういういろいろの働きを子どももおとなもっています。その一番根底にある部分は何かということ、それはからだを動かす働きであるといえるでしょう。

まだ歩けない赤ん坊の場合でも、自分で動かすことのできるからだの部分の動かす。我々の相手である幼児は、思うようになっちに行ったりこっちに行ったり動き回ります。保育はまず、からだを動かすことが主な部分であるような仕事であると思います。頭で考えるというより先からだで考えるところというようにいいますが、それはからだを動かして外の世界のいろいろなものに触れたり、また、からだを動かして人に触れたりすることがもとなっていて、そこから抽象的な思考というものもできるからです。これは大変なことだと思えます。保育の学問がどんなに進んだとしても、抽象的な理論がつみ重ねられても、保育そのもの

が、からだを動かすことが主になって作られるんだという事実
は、変わらないだろうと思います。

からだを動かす部分というのは私どもが余り意識しないでやる
ことが多い。考えずに動く場合が多いのです。かけ出したり、手
先で何かやったり。だから、保育をしている人に「きょうは何を
しましたか」と尋ねても、余り答えられない場合が多い。からだ
をうんと動かしていた、じゃ、頭が働いていないかというところ
じゃない、からだを動かすことによって頭を使っていた。まあこ
ういう点は今の僕らの生活なんてさかさまで恥ずかしい次第で、
頭だけ使っていてからだを動かさないから本物が出てこない。子
どもの生活がなぜおとなにとって羨しいか、またなぜ本物がある
かというところ、からだを動かすことが主になった生活だからとい
うことがいえるかもしれません。

そのからだを動かすことの上に、さらに、目でみたり耳
で聞いたりするというようなことが出てきます。まあ、これはほ
んどどからだを動かすことと切りはなせないことなんですけれど
も、目で見ると、耳で聞くとというのは上等な方です。もつとからだ
を動かすことと密接なのは、からだを動かす感覚、ものに触れる
感覚、こういう原始的な感覚が目より耳より先にあります。その
原始的な感覚が子どもにとって大変大事であるということで、こ
れを僕らは大変重要に考えなくちゃいけないと思います。

次に、このことをちょっととぼして先へ行きますが、目で見た
り耳で聞いたりするということの上には、頭の中で作り上げる、
想像する、目の前に実際にはないんだけれども頭の中に思い浮か
べるといような世界があります。今、「あなたの家はどんなか
っこうをしていますか、あなたのうちの門を入れてから自分のへ
やまで行くのはどんな様子ですか」なんて尋ねられたら、簡単に
目の中にそれを思い浮かべることができる。こういうのを視覚表
象などといったりしますが、思い浮かべる世界というのは、目や
耳で思い浮かべるよりもつと前に、からだの感覚を使う表象があ
ります。表象などとむずかしい言葉ですが一応使っておきます。

子どもが運動会のことを思い浮かべる時には、子どもはまぶた
の中に目に見える如く思い浮かべるのではない。遠足のことを思
い浮かべる時もそうです。おとなはどちらかというところを先
なってしまうって「遠足の絵を描きましょう。運動会の絵を描きま
しょう」などというところ、すぐその時のありさま、光景が目の前に
浮かびます。

ところで、こういうことを考えてみたらどうでしょう。水泳を
する時、いかにからだを動かすかを思い浮かべてみましょう。そ
の時我々が思い浮かべるのは、自分が泳いでいる姿なんかじゃな
いんです。泳ぐ時に手を動かすその手の感覚、それから足を動か
すその足の感覚、手と足をうまく調子を合わせる感覚、そういう

いわばコツというようなものを思い浮かべます。

我々の体験の上でもそうなのですから、子どもの思い浮かべる世界というのは、どうやら視覚や聴覚の表象よりも先に、運動感覚や触覚の表象の方が先ではないかということが考えられます。だから、運動会の絵を描いた時に、子どもが描くのは、もしも本当に思うように描けるとするならば、目で見た行動よりもっとほかのものが出てもよいはずだ。その時からだが受けた感動、からだで受けた印象というものが、もっと生のものが出てきているはずだし、また、そういうものを出す場合がしばしばあるんじゃないかと思えます。

今、一番人間としての下の段階になる部分として、からだを動かすこと、それに伴う表象というようなことを述べました。さらにまた、外の世界に人が触れた時に、目で見たり耳で聞いたりする以前に、人間が自分の感覚を自分で感じるといふ世界があります。発達のというと、赤ん坊の段階や、やや発達のおくれた子どもの幼児の段階というのがそれです。たとえば、赤ん坊がオッパイを吸う時は、お乳を吸う口の感覚というものを楽しんでいますが、哺乳びんとかお母さんのオッパイというものの認識はないわけです。つまり、外の世界を認識する前に、自分自身がそれにふれて感覚の楽しさを感じるわけです。おとなでも多分にそんなことはあるのですが、おとなはもういろいろなことがたくさ

ん押しよせてきていますから、その部分はほとんどかくれてしまっています。

だから、小さい子どもには、自分が理解できないようなものがたくさん、目の前を動いている時、たとえばデパートなどで大勢の人がゴチャゴチャ動いていて、しかも子どもはこれらの人の腰より低い部分をウロウロしているような時、人間が動いているなんて印象じゃなくて、何かこう巨大なものがいたりきたりしている、あるいは目の前を光や影がいたりきたりしているようにうつるにちがいない。いわば、そういう風な世界というのが子どもを感じる世界です。

そういうものの中から、だんだんに外の世界が見てとれる、聞いてとれるようになってくるわけです。で、その時に、外の世界を知るには、目を通したり耳を通して、感覚器官を通して知るんですけども、子どもがそれを知る時には、そのものにふれて新鮮な感動があるわけです。というのは、おとながそれを知る時には、目で見たものを目で見たままに感じるよりも、それをおとなの知識というもののあみの目を通して見ます。そうやって意味づけたりして見る。子どもを見た時、この子は精薄児だと見る、この子は自閉症、この子は正常児、この子はIQの高い天才児だというように見る。こういう例を思い浮かべると大変はつきりするでしょう。

我々の中にこういう知識があつて子どもを見ると、子どもをそのままずっとみるんじゃなくて、私どもがこうだこうだといつてそういうひきだしを自分の中にもつていて、そこに入れていくのが外の世界を知覚する仕方です。子どもはそういうひきだしがありませんから、あつたとしても、それは非常ににやもにやした袋みたいなものですから、はつきりとは区別しません。そのものを、自分の心に感ずるままに、すつと受けとめます。というのは、私どもの知識とか、意識してもつている壁をつき通して、も一つ一つの奥の世界でもう一つ奥の心の部分で、それを受けとめていくということにもなります。

だから、おとなはよほど自分のからを打ちこわしてかかる必要があるわけです。それが大変な作業で、我々は教育によつて何かを作り上げるといふことが非常に大事のように思っていますけれど、自分自身について考えるならば、自分の中に作られた余分のものを打ちこわして、ものにふれたそのものをそのものとしてすつと受けるようにする、ということにうんと力を使ってしまふわけです。まあ、若い方はそれほどでもないけれども、段々年を経とくるとそれが大きくなるのです。

さて、その心の一番奥のところを受けとめて感動することのできる世界というものを耕しておくことが必要であつて、人間みんなそれをもっているんだけれども、いろいろのもので邪魔されて

いて、それが出てこないことがたくさんある。こういう現実をしょつて、子どもとおとながいっしょになっているのが保育の場なのです。

本質的体験

もう一度、今のところにもどつて考えてみましょう。まず、おとなの方から考えてみます。保育者であるおとなが、子どもを見たり聞いたり、それに触れたりする時に、いや、保育者であるというのはちょっと抜きにしましょう。単に「おとなである」とだけしておきましょう。おとなが外の世界にふれたりする時に、まず我々の一番上の層が意識して作り上げた知識の世界、あるいは一生けんめいに考えて分類する世界というようなものがあります。この世界をすつと奥の方に入っていくと、ものに触れて卒直に感動する世界がある。その卒直に感動する世界つてもものを、私は、きょうはそれについて一生けんめい話したいと思つていますが、どうも十分に説明しきれない。皆さんにも研究していただかないといけません。たとえば、人にふれた時にあいさつしたり、日常の会話をかわしたりということであつたといつてすましてしまう場合もあります。もっと深くふれようとする場合、そこで、その人との間に火花が散るような、そういう情熱といふものが出てきます。そういう情熱にふれると、その人に本当にふれ

たというような感動を受けるものです。

保育をする場合にも、保育者と子どもが通りいっぺんの、いわば、職業意識の程度でふれている場合と、それから、その子どもに全身を投げかけ、子どもも先生に対して本当に信頼してぶつかり合って、そこに人と人とのふれ合いが、火花の出るようなふれ合いがあると、それは見えていても感動するし、保育している本人も子どもも、そこに見かけの人間をこえて、これが人間の本質というか人間の最も大事な部分だということを感じるような、そういうふれ合いが出てくるんじゃないか。それが出てくると、そういうところで人がぶつかると、その人というものが「わかった」といえる体験になる。

そこにあるから、余り興味もないけれどもいじっている、というのと、そのものに引きつけられてそのものの中に入りこみ、自分がそのものなんだか、そのものが自分なんだかわからないくらいその中にひたり込んでしまった場合、そのものは我々にとつて違った意味をもってくる。そうすると、そのものがわかってくる。恐る恐る遠くからふれている場合は、恐ろしい世界であったり、自分には歯が立たなかつたり、劣等感をもちそうなものであったりする同じものが、一度自分がそれにとらわれて、そのことに時間を使いエネルギーも使った時には、そのものにずっと入りこんでしまう。子どもが夢中になつて砂場をやるように、子ども

が本当に熱中して粘土をやるように、表面の世界からずーっと奥に入りこんでいて、誰かが声をかけても気がつかない、友人関係なんかははねのけてしまい、自分とものとの間で対話をしていて、その奥の方のずーっと深いところに入っている。それは、知能とか理性とかの一番根底にふれているのかもしれない。うんと静かな世界かもしれない。そういう中に、ともかく入りこんでいるのです。

不思議なことに最初のうんと原始的な時代というのは、泥をこねたり粘土をこねたりすることと関係が深い。歴史的にみても土器や陶器をこねたりというような土いじりの世界が古くからあります。手でいじくる、手と土とが主調になる世界は大事な世界です。

それから、文化的なことについていえば、こういうことをしなければならぬ、こうすべきである、というような倫理感でもって文化にふれているような時、道徳・宗教・倫理などは我々をしぼるものであったり、あるいは反発感を起こすものであったり、あるいは、それを自分のものにすることによって自分が優越感をもつものであったりするのですが、それをつき抜けてもう一つ下にいくとそうじゃなくなってくる。たとえば、我々が小さい時に学んだ「堤防に腕をつっ込んでオランダを洪水から救った少年の話」など、こういうものにふれた時に、我々は道徳的なおそれや

精神というものに気づかされる。それは子どもにもあるので、本
当に自分が可愛がっていたものが死んでハッとしたりした時、それから
お話の中で心をハッと打たれた時、あるいは音楽なんでもものは割
とそうですね。本物の精神にふれた時、我々の気持ちがあぐつと高
まって、人間の肉体というものからむしろ超越しちゃって、空の
中にでもふきつけられるような昂揚した感情をもったりします。

音楽のことにちょっとふれましたが、それに似たような子ども
の遊びの体験というと「鬼ごっこ」あるいは「かけっこ」のよう
なものは、それに近いかなと思います。「鬼ごっこ」の面白さな
んてのはルールを守るなんてものじゃないですね。どうも近ごろ
の指導要領は「鬼ごっこ」をやっているんだか、ルールを守るため
のしつけをやっているんだかどっちかわからないような気がし
て、私は大変おかしと思うんですが。「鬼ごっこ」の面白さな
んてのは、子どもが力一杯かけ出して、もうくたくたになるまで
かけて、そしてかけ出すことは自分の体のわきを風がヒュー
ッと通りすぎる感覚であり、それは聴覚的なものでもあるわけ
です。で、もうこれ以上かけられないところまできて、鬼につかま
ってしまう。そういうところに「鬼ごっこ」の面白さがあるんだ
けれども、「丸鬼」だの「陣鬼」だの、誰がずるしたのどのよう
と、そういうことにとらわれてしまうと「鬼ごっこ」の根本が抜
けてしまう。

そこで私どもは、そのもの子どもにとつての、うんと心の奥
底に深く入った、一番の本質にぶつかるようなところで、子ども
の姿を見なければならぬと思うし、そこに教育の根源をみつけ
ていかねばならないし、その世界を養うことによって、子どもが
感動する心を養うことができるんじゃないかと思えます。

いろんな活動があつて、子どもは、おとなだってそうですが、
ある時、フーツと気をぬいて休みます。休んだところの一番の極
限は、極限という言葉は余りよくないですね、ずーっと休んでい
るとそのうち自然に眠ったりします。これは人間にとつて一番根
本的なところで、一日活動していれば眠くなるのは当たり前です
ね。それは休息であり沈黙であるわけで、そういう時はいやおう
なしに人間にやってくる。子どもにとつても、そういう静かな休
みの谷も、ある心の深い所の重要な部分になってくるでしょう。

そして、こういうところが、子どもの心の奥にあつて、子ども
は外の世界にふれているんだけれども、それは決して目に見えて
いるものを見ているんでもないし、耳で聞く世界でもない。やは
りそれは子どもの心でもって見る世界、心でふれる世界が子ども
を包んでいる世界です。だから、幼稚園の先生なんてのを私の記
憶で思い返してみると、その先生が年をとつたとか若かったと
か、どんな顔をしてたとかまるきり覚えていない。ただその先生
が自分のそばに寄ってきた時の、何かしらあたたかい感じとか、

その先生がいなくて何か物足りなくてたえずキョロキョロしてさ
がしに行つたとか、そんな記憶がたくさんあるのです。

また、新しい先生が何だかキビキビしていて近よりにくくて、
別のクラスの先生のそばに行っちゃったなんて記憶もあります。

子どもの時代ってのは、外の世界を見ているというよりは、その
世界の一番本質的な大事な部分が子どもに届いている。むしろ、
子どもは自分の心の世界から外の世界を見ているといえるかもしれ
ません。保育の世界はいろんなことがゴチャゴチャある世界で
すけれども、子どもと保育者の間に心の世界ができていくところ
に、外からではわからない人間の本当の世界があるのでしょ。

子どもは、そうやって外の世界を体験しながら、丁度おとな
が、一体保育ってどういうことなんだろうとか、あるいは人生と
は何だろうとか、疑問をもってさがし求めるのと同じように、子
どもは子どもなりの世界で本当に自分の世界で何ものかをさがし
求めてさまよっている。そしてある時はこれを、ある時はあれを
みつげながらさまよいつける。そして自分の存在の中心点をみつ
けると、そこで子どもが一步前進して、次の段階にとび越えてい
くんです。これが発達だろうと思う。精神の発達です。

そして、その時には子ども自身が、外の世界に向かってぐんと
一步足をふみ出して、からを破って上の世界に行くのです。もつ
と平たくいえば、今までは一人でしか遊べなかった、いや、一人

でなら遊ぶことができた子どもが、新たに友達の世界に目が開け
て、そこから友だちの世界に入っていく。そこでまたわからない
ことができ、何かにぶつかり、またさがし求め、ぶつかって前進
して、今度は文字の世界にぶつかったり、体育の世界、あるいは
知識の世界にぶつかっていく。こうやって、常にぶつかっては破
れ、ぶつかりぶつかりしてさまよいつける、あるところでわかると
前進してまたさまよって、こういう風にして子どもは成長してい
くのです。このことはおとなだって本当は同じでしょう。

そんな子どもの世界で、子どもが困った時、おとなもいっしょ
に困ってあげる。子どもが本当に「あ、そうだ」とわかった時、
おとなもいっしょになって「あ、そうだったね」と喜んであげ
る。そういうおとながそばにいることによって、子どもはそのこ
とを自分でまた新たに確認し、「これでよかったんだ。これで自
分の生活をもう一步進めていけるんだ」ということがわかる。そ
して、安心して一步先にいける。保育者というのはそういう位置
づけであり、そういう役割を果たして子どもの中にいるのではな
いでしょうか。

今ここでは、保育の場における人間としての子どもとおとな
を、抽象的な形で考えてみたわけです。ものとか文化とかについ
ても多少ふれましたが、そういう面はあらためて、もう少し深く
考えてみる必要があります。

(現職研究講義より)

遊びの空間



飯沼佳子

幼児の生活で、最も大切なものは遊びです。

おとなにとって、生きていくために働くことが不可欠であるのと同じ比重において、幼児にとっては遊びが重要なわけです。

子どもが、十分自己を出し切って、また、自分のもっている能力を駆使して、遊んでいる時のいきいきとした姿を見るにつけ、子どもを守ってあげるべき立場にあるおとなは、真剣に子どもの遊びについて考えなくてはならないと思います。

子どもが遊べるためには

子どもが十分自分の力を発揮して遊べるためには、どのような条件が必要でしょうか。

1、まず遊びの場が確保されていること
2、遊びの媒介、および発展の要素となる材料があること

3、十分に遊べるだけの時間があること

4、加えて遊びが発展していく契機としてのおとなが存在すること

第一の条件である遊びの場の確保すらままならないのが現在の一般的傾向ですが、第一、第二、第三の条件が豊富に満たされるならば、これだけでも、十分子どもは自分の力でいきいきと遊べるでしょう。

以下で、日々保育にたずさわっている者として、幼稚園での幼児の遊びを、遊びの場との関連においてとらえていきます。

「遊びの空間」という題を編集部よりいただいた時、まず頭に浮かんだことは、自然の恵みをそのままに受けられる広い場所で生活する、わが幼稚園の子どもたち一人一人の姿です。

「遊べない子どもをどうしたらよいか」等の研究がよく行なわれていますが、わが園の場合、入園当初こそ「遊べない子どもをどうしたらよいか」で頭を悩ませますが、一学期も中ごろからは遊べない子どもはほとんどいなくなります。

なぜでしょうか。

考えてみますに、私どもの幼稚園およびその周囲の環境が「遊べない子どもを生み出さない」ような、言葉をかえていいますと子どもにとって魅力に満ちた環境だからではないでしょうか。

サッカーけりで庭を駆けまわっているグループ、野球をしているグループ、なわとびをしているグループ、ひょうたん鬼をしているグループ等、いくつもの遊びが同時になされていてもいさかいのないだけの広い庭、それに続く林、園から一步足を踏み出す

と、周囲は、田んぼ、草原、林など、田園にかこまれた場所に位置するのがわが幼稚園です。

このように、先に書きました十分遊べるための条件の、第一、第二が備わっていることが、遊べない子どものいない最大の要因と思われる。

しかしながら幼稚園での遊びは、漫然と子どもを遊ばせておけばよいというものでは、もちろんありません。教育計画を子どもの遊びの中で実現させていかななくてはなりません。広い遊び場に恵まれている本園では、積極的に戸外で子どもを遊ばせることに重点をおき、保育計画を立案しています。

自然との出会い

園およびそれをとりまく環境は、幼児にとってよいものではありませんが、ここで生活する子どもたちも、園を離れますと、コンクリートの壁、建てこんだ家々、激しくゆきかう車、という状況下で家庭生活を送るものが大ぜいいます。

ですから、入園当初の子どもたちは、作られた遊具があり、庭として整えられた園庭での遊びには比較的スムーズに入っていますが、林に入ったたり、作られた遊具のない野原ではとまどい、そこでは遊べません。

林や野原に行きたがり、そこで遊べるようになるまでは、教師

の積極的なリードがどうしても必要です。玩具とか、ブランコ、スベリ台とかいった作られた遊具で遊ぶことしか経験してこなかった子どもたちは、自然の中でどうやって遊んでいいのかわかりません。

まず、教師が子どもと共に、林や野原を、繰り返し繰り返し歩くことから、自然の中での遊びを発見させます。ある子どもにとっては、野に咲く花々を見つけることが、またある子どもにとっては、昆虫の卵を見つけることが、また他の子どもにとっては、木に登って木をゆすることが楽しみになります。作られた遊具の場合、ある一つの遊具の遊び方には限度がありますが、自然の中では無尽蔵といつてよいほど、いろいろなことをして遊べます。

子どもが、自然の何かで遊べるようになったら、しめたものです。子どもにとって、林に入ること、野原に行くことが楽しみとなるわけです。教師が子どもを自然に近づける近づけ方で大切なことは、「そこで遊べる何かを子どもが見つけれられるような」リードです。

自然の中での子どもの遊び

澄んだ空気が、はてしなくひろがる青空、右左に雪を抱いた山脈のもとでの、つくし、たんぽぽ摘み、鬼ごっこ、かけっこ、ひばりの舞い降りるのを待って息をひそめ、ひばりの姿を追いかける

遊び、うっそうとした木々の茂みの中の虫がしがし、木陰にごぎを敷いてのままごと、日ごとにあぎやかになり、明るさも一段と増した木々の紅葉の中での落ち葉拾い、どんぐり拾い、きのこさがし、葉を落とし、寒々とした林の中での探險ごっこ、雪合戦、雪だるま作りと、四季おりおりに正しくめぐってくる自然の変化と、そこでの遊びは、子どもたちにとって感嘆の多い日々です。

初めて氷を見つけた晩秋の朝、宝物でも持つように、氷を手にして、ハンカチにくるみ大切に持って歩く子どももいます。

北アルプスの峰々に初雪が降った朝、口々に山の白さを報告にくる子どもたちの目の輝やきを、いつまでも失わせたくないと願います。

どんぐりをポケットいっぱい拾い、かぶっていた帽子にもいっぱい拾い、まだ足りなくて息せき切って保育室にとびこんで、袋を要求する子どもたちの真剣な姿、かぶと虫を捜して、何時間もう根気よく林の木を一本一本丹念に調べて歩いている男児のむれむれなど、どの子どもも、どの子どもも、園での生活は夢中の連続です。

春から秋にかけての気候のよい時には、つとめて園外に出ます。園やその周辺では得られない、自然での経験を園外保育を通して得ることで、さらに子どもたちは、自然の中で遊ぶ楽しさを増します。

園外保育の主なもの

春——おたまじゃくし、ふな等をとること。つくし、たんぽぽ摘み。ことりの声を聞くこと……。

夏——野の花摘み。草原での遊びを十分味わうため、園内で使う遊具、たとえばままごと道具、ボール等を持って、一日がかりで外で遊ぶこともあります。男児は木に登るのが好きで、何十メートルもの大木のでっぺんまでするするとよじ登る子どももいます。

秋——きのことり、どんぐり拾いに、これもまた、一日をついやして出かけます。また、近くに幼児が登るのに手ごろな山があり、年齢に応じて、一部バスを使い、子どもだけで、歩く遠足をします。年長児は、往復約八キロの山道を、約二時間三十分で全行程を歩きます。毎年の例ですが、全部歩けたということで子どもたちは大いに自信がつき、その自信が、生活の他の面でプラスとなつてあらわれます。

冬——山国の信州のこと、きびしい寒さが続き女児などは室内にこもりがちですが、男児は寒さをもとせず、戸外でよく遊びます。雪でも積もろうものなら、園庭の高低を利用してそり遊びに夢中になります。雪が少なくてそりがすべれなくなると、年長児の場合ですが、集団で雪を集め、そりのすべる道に雪を手でたたいてははってゆき、長い時間かかってそりがすべれる準備を

します。

雪を集める子ども、それをそり道にたたいてははってゆく子どもと、十数人の子どもが、そり道を作るといふ一つの目的に向かつて、目を輝かせ、息せき切つて動く姿は、「遊び」を通して小集団のうまい動きを、まざまざと見せられる思いです。

今まで、水平的な空間において自然の中での子どもの遊びを見てきましたが、子どもは、ちょっとした高さの所でも登るのが好きです。

男児の場合など、園外保育に連れ出しますと、教師の側の園外保育の目的がどんなものの場合であれ、男児自身の園外保育の楽しみの多くは、登れる木を捜してなるべく高く登ることにあります。

近くに、小高いちょっとした山があり、そこには、松本の町が眼下に、一望のもとに見られる所があります。

そこへ園外保育で行きました。松本の町がすぐ目の下に見られる所まで来ますと、子どもたちは思わず立ちつくし、そこにひろがる風景に見とれました。こういった垂直的なひろがりにおける幼児の遊びもまた、経験させることが大切です。

自然の中での幼児の遊びには、驚き、心地よさ、感動が伴う

ことが多々あります。それがまた、いきいきとした遊びをよびおこすものともなります。

からだを動かすことが好きな子どもたちにとって、広々とした場所、自由に、思い切り動きまわった遊びができることは、子どもの心にも潤り知れないよい影響を与えていることでしょう。

幼児期の子どもに大切なことは、健康に恵まれたからだを作ること、感受性豊かな心を養うことです。自然の中での遊びはこの二つを十分に満たしてくれます。

人工の遊具の場合、どうしても遊び方に限度が出てきますが、

自然物の中での遊びは、

①子ども自身が考えなければ、遊べない

②遊びの内容、種類は、子どもの能力、好みにより、数限りなくある

③遊びの場が広いため、身体全部を使つての遊びが中心となり、したがって運動量が多くなる

④仲間どうして遊ぶことにより、遊びがより深まり、集団で遊ぶ楽しさ、集団の中での遊びのルールがおのずと発達することなどが特徴としてあげられます。

園庭と林とで展開される遊び

かくれんぼ

年長児になるとかくれる場所の範囲もぐんと広くなります。園舎のまわり、林の中、林の向う側とたくさんあり、新しいかくれ場所を見つげながらかくれることが、一つの楽しみにもなります。一方、鬼になった子どもは、四方に散った友だちを捜すだけでも運動量は大きなものとなります。

かくれている方も、園舎の陰から木々の間を、鬼に見つからないよう、息をひそめ、小さくなって移動してあるく時の緊張と、あとにつづく、見つからなかったという成功の喜びは大変なものです。

林が園庭に続いてあることで、鬼ごっこに例をとって述べましたように、林と庭を一つにして遊びが展開されることがよくあります。林に庭に、保育室にと、子どもが分散して遊びますので、子ども一人一人がゆったりとした場所を自分の遊び場とすることができます。

遊びの空間と幼児の生活全般とのかわりあい

遊びの空間がたくさんあることが、園生活全般にわたって子どもにどんな影響となって現われているかを最後に考えてみます。

①活動量が大きく、遊びでエネルギーが十分発散できる。また、子どもが大声で遊んでも声が騒音とならず、したがって、騒音からくるいらがなくて気が持ちよい生活が送れる。

②遊びの場が広く、数多くの遊びができ、子どもが分散して遊べる。

どんな子どもでも、自由に自分のやりたい遊びができ、自分を發揮できる場所がある。

③発見、驚き、喜びの多い毎日である。

恵まれた自然の環境の中では、何らかの発見は数多くあり、小さい発見でも子どもには大きな喜びにつながる。

このように、自己を出しきった遊びが園生活の中でできるため、本来は気が小さく、友だちや教師になかなかなじめないような子どもも、スムーズに自分の心をひらいて友だちや教師に接することができ、教師に話のできない子どもは皆無です。

幼稚園の生活が楽しくてたまらないというのが園の大多数の子どもの気持ちです。病気の時も幼稚園に来るといって親を困らせる子どもが多いようです。

目の輝きにはりがあり、いきいきとしているのが、また、わが園の子どもの一般的な傾向です。目を輝かせ、息せき切って生活をしている子どもが大勢いるというのが、一言でいったこの園の特徴のようです。

(松本市青い鳥幼稚園)

みどり会主催夏季研修会

申込案内

○人員 一〇〇名(定員になり次第メ切り)

○会費 六、五〇〇円

宿泊費 五、五〇〇円(二泊三日六食分) 参加費

一、〇〇〇円

○申込方法

1、参加費一名一、〇〇〇円を申込用紙(左記の形式)にそえて、六月三十日までにお申込み下さい。

2、参加費は不参加の場合もお返しいたしません。

○申込先・東京都文京区大塚二一一一お茶の水女子大学

附属幼稚園内みどり会研究会宛

・振替申込の場合は口座番号東京九九〇八五番

(文京大塚四郵便局)

○申込形式(はがき大)(各人一枚のこと)

○氏名

○勤務園名

○住所又は連絡先

○希望分科会 第一希望

第二希望

○宿泊日に○印

23日	夕
24日	朝 昼 夕
25日	朝 昼 夕
26日	朝 昼

但し 二十三日夕食より参加の方は二、八〇〇円
二十四日昼食希望の方は、二五〇円超過になります。

時間と空間

近ごろは写真が普及して、誰でも手軽にカメラをぶらさげて、簡単に撮影をしていくという時代になり、写真が我々の日常生活の中に溶けこんでしまっているという状態になっています。

この場合の写真の役目は何かといえますと、昔からいわれているように現象の記録であります。私たちは、あとでこれを見ることによってその時の情景を思い出しますし、結婚式の記念写真をながめることによって、あの時は誰が出席しておられたかを調べることが出来ます。写真を整理して、撮影年月日や時刻まで記入したアルバムを作っておいて、さらに必要なときに必要な写真がすぐ見られるように、適当な索引を作っておけば、たいへん便利なものになります。

この場合、近ごろ使われている言葉でいえば、アルバム一枚一



神山雅英

枚の写真は必要な情報を記憶しているものであり、いわゆる「メモリー素子」であります。また索引を使って必要な写真をえらび出すことは、必要な情報の「読み出し」ということになりました。

こういう写真的記録法は、昔から複写という方法で知られていますが、写真またはフィルムが多量になると、保存のため膨大な場所が必要になり、どうにもしようがなくなります。これに対する救いとして出現したのが、マイクロフィルムと呼ばれるもので、なるべく小さい写真（一般にはフィルム）にしておくという方法です。

この方法は情報を画像として記憶保存しておく方法ですが、情報量をもっと多量に小さい場所、すなわち空間におさめておくに

は、情報を画像でなしに電氣的な情報に変えて記憶させるようになってきたのです。この場合、グラフや数字、文字などは電気信号に変えられて、テープなどにおさめられてしまっています。こうすると、いろいろな情報が従来よりはるかに短い時間で利用できるようになりました。たとえば「アナタニコレイジヨウノヒトハアリマセン」ということもできますし、列車や航空機の切符の予約も手早くできて便利になってきたのです。この本体はいうまでもなく、電子計算機であります。今までの例でおわかりになったように、世の中の一つの方向として、時間の短縮と空間の小形化を目指しているのです。

こんどは別な角度から空間を考えてみましょう。前と同じように写真を例として考えてみます。私たちが現在ふつうに使っているのは、三五ミリ判、またはその半分の大きさのハーフ判と呼ばれるサイズが多いのですが、このサイズはそのままでは小さすぎるので、大きく引伸しをしたプリントを作るのがふつうでしょう。このように、我々の肉眼で見にくいものは拡大して見ると見やすいという方法が多くの場合に使われています。望遠鏡や双眼鏡を使って遠くの風景や物を大きくして見ようというものもこの例です。また肉眼ではほとんど見えないものを大きく見るといものは顕微鏡です。ふつうの顕微鏡は、二〇〇〇倍も拡大して見ることができますし、電子顕微鏡とよばれている、光のかわりに電子を利用する顕微鏡は、容易に数万倍から百万倍も物を拡大して見

ることが出来ます。これは空間の拡大と考えていいと思います。

しかしこのような拡大をする場合に大事なことがあります。それはただ物を大きくして見ただけでは細部の構造はわからないということです。これはピントのよく合った写真を大きく引伸しすると、やはりハッキリした写真になっていろいろなものがよく見え、判別することが出来ますが、ピンボケの写真をいくら大きく拡大してもボケた写真しかできませんから、細部の構造をハッキリ見わけることができません。新聞の写真をもう少しよく見ようと思つて、虫めがねで拡大して眺めたとき大きく見えても、実際に見えるのは印刷の網目判のボツボツだということによく似ています。このように物をくわしく観察するには、大きくするだけでなく、細部までハッキリしていなければならぬということです。このことを一般に「解像力」がよいとか悪いという言葉であらわしています。カメラのレンズのよしあしは解像力の良否をいうのです。同様に、よい顕微鏡というのは解像力のよい（分解能がよいともいいます）顕微鏡なのです。

解像力のよいということを利用すると、非常に小さいものを拡大してハッキリ見ることが出来ることは空間の拡大ですが、同じことを利用して空間の縮小的なことが出来ますが、このことは最近のエレクトロニクスに非常によく用いられていることです。それには解像力のよいレンズと、解像力のよい写真の乾板を使うと、非常に精密に図面を小さく撮影することが出来ます。このこ

とを利用するとエレクトロニクスに用いる電気的な回路の配線図を、非常に小さく縮写したものを作ることができます。

最近ラジオやテレビ、その他のエレクトロニクス装置に広く用いられるようになってきたIC（集積回路ともいいます）を製作するための基板はこうして作られるのです。ICができるようになってからは、今まで大きい空間を占領していた電子回路の部分が極度に小さくなり、全体としての小形化いわゆるコムバクト化が行なわれるようになったのです。

しかしこのように小さい空間に納めてしまっても、その働きすなわち機能は、大きいものに劣らない、いやむしろそれ以上であることが必要なのです。この条件が満足させられなければ単に小形化するということはあまり意味がないことになるのです。飾りものとしてはいいでしょうが役にたたないものになるのです。以上は多少工学的な立場から見た空間の拡大と縮小ですが、物理学的にみれば、大きく分けて、ミクロの世界とマクロの世界に分類することができましょう。ミクロの世界というのは、いいかえれば、分子や原子の世界といつてよいでしょう。もちろん原子核もこの世界に属するものです。この世界に通用する「物差し」は、我々の日常生活で使っている物差しにくらべてはるかに小さいものです。我々はふつう、メートルとかセンチメートルで長さをはかりますが、ミクロの世界では一メートルの百億分の一を単位とした長さで物の大きさがはかれます。（この単位をオング

ストロームといいます）こんな小さい物差しが通用する世界の空間とはどんなものであるか想像がつくことと思います。

またマクロの世界というのは我々のふつうの物差しの通用する空間に属しますから、我々の人間のもつ五感の働きで間に合います。物を見るには肉眼で十分です。少しぐらい小さいものを見るには虫めがねを使えばよく、さらに小さくなっても顕微鏡が役にたちます。ところがミクロの世界、すなわち分子、原子の世界をしらべるには、特別な物理的な観察測定装置が必要になります。前に述べた電子顕微鏡もその中の一つであり、ミクロの世界をマクロの世界のように扱えるようにするために、学問の分野で努力が続けられているといえましょう。

さて標題の時間の問題に触れてみましょう。

人間の生活における時間の単位からいえば、昔は二時間単位ですんでいたが、今は一時間単位になっているし、このほかにもっと重要なことは、昔はなかった分とか秒という時間がいりこんできたが、その重要性は近年になるほど増してきている。さき为例として述べた写真の引伸しに相当したものに、時間の引伸しというものがありません。

これは最近、テレビで私たちがよく見るスロービデオといわれるものです。すもうの中継で、好取組の勝負を「只今の勝負をスロービデオでもう一度ご覧下さい」といった具合に、実況のときより早くはユックリ勝負を再現して見せてもらう。そうすると

私たちのようなしろうとにも勝ち負けの様子がよくわかる。また同様に、野球の試合でホームランが出た場合「もう一度」ということで、ホームランを打者が打ったときの様子を再現してみせてくれる。そうすると投手の投げたボールの進路が見られ、バットにボールがあたった瞬間の様子までハッキリ見せてもらえる。

このような瞬間的な現象を人間は見きわめることはできない。前に使った言葉にならうていえば「人間の眼の時間的分解能」は十分でないで、これを補うには「スローモーション映画」と採用しなければならぬ。この方法はスローモーション映画といわれ、映画では昔から用いられてきたものであるが、物理学や工学の分野では高速映画といわれて、非常に早い、つまりきわめて短時間の間におこる現象を研究するのに大きい役割を演じてきており、一秒間に百万コマも撮影できる高速映画カメラもできています。これを用いると、百万分の一秒ぐらいの短い間に起こった現象を捕えて人間の目で見るようになるのです。

このようにして時間の拡大が行なわれるようになると、一秒という時間は長すぎるというので、千分の一秒（ミリ秒）がまず使われだし、次に百万分の一秒（マイクロ秒）が、その次には一億分の一秒（ナノ秒）が使われ出してきました。

また最近では千億分の一秒（ピコ秒）という昔では考えられぬような短い時間の単位が学問分野では使われるようになっていきます。このような短い時間が使われるようになったのはいろいろ

な理由がありますが、一つは前記の高速現象の研究のため、もう一つは物理学の研究が進んでミクロの世界に研究がはいって行くくと、そこで起こっている現象はやはりきわめて短い時間の間に起こっているということであり、さらにはまたエレクトロニクスの分野でいえば、ラジオの放送電波の周波数は、五〇〇から一〇〇〇キロヘルツ（電波の波が、毎秒五十万回から百万回振動しているということ）またテレビやFMラジオの放送電波は毎秒一億回程度振動しています。このような電波の一回の振動に要する時間はマイクロ秒以下であり、最近使われはじめたUHF放送ではさらに短い時間になります。

このようにエレクトロニクスの分野でも時間の概念はどんどん短くなつていきます。しかしながら、一方では、今一番速い速さをもつ光でも太陽系に属する天体以外の遠方に到達するには非常に長い時間を要します。天文に興味のある方はご存じのように、このように遠い天体までの距離をあらわす単位として、光が一年間かかって進む距離を一光年といつてあらわしています。空間的には宇宙ははてしないものであり、そこに到達するにはたいへんな時間が必要でありますし、ミクロの世界はきわめて小さい世界であります。そこには起こる自然現象は同じ考え方で説明できるものがあることが段々わかってきました。まことにもしろいことではないでしょうか。

（前東京大学工学部）

ユートピア

かけ足のヨーロッパ見学

竹 中 京 子

昨年夏、お茶の水女子大附属幼稚園
夏期講習会に出席いたしました折、園長
周郷先生のヨーロッパ幼児教育視察団の
ご計画のあることを伺いまして、先輩と
同行できますのに意を強うして、参加さ
せていただきました。

秋にはまだ早い九月初旬、旅の支度も
心の準備もできませんまに羽田を飛び
立ちました。ロンドンをふり出しに、ヨ
ーロッパ六カ国二十二日の旅はかなり強
行軍でしたが、健康のおかげで楽しい旅
を続けることができましたことも、私を
とりまく大勢の方々のご厚意も忘れるこ
とはできません。

最近海外視察に出られる方も日を追っ
て多くなり、講演会をとおして、幼稚園
の実態もかなり紹介されるようになりま
した。ことに、大きくゆれ動く世界の中
で、日本の幼児教育もかなり世相の波に
ふりまわされている感を深くいたしま
す。幼児教育の歴史は、時代は移り変わ
りましたが、多くの子どもたちの姿をみ

つめて、よきものを育てる努力は休むこ
となく毎日続けられております。

あのいきいきとした輝いた瞳を失わせ
ることのない保育が、幼児の幸福につな
がってゆくことを考えますとき、公害は
もとより、日常生活のありかたにも、工
夫と反省が必要であることに気がついて
まいりました。おとなたちがうっかりな
げかけた言葉に小さい心を傷つけること
がなんと多いことでしょうか。洋服のよご
れたことに小言をいうことはあっても、
子どもたちの心をよごしてしまったこと
に気がつかないおとなであってはならな
いと思います。その意味でもこのたびの
旅行が、この目でこの肌で、保育の実態
を見てくることができましたことは幸い
であったと思います。

それぞれの国情によって、教育内容は
少しずつ違いますが、どこの国も教育者
の養成には非常に力をいれていたという
ことです。直接幼稚園で指導にあたっ
ておられました先生方のお姿を拝見いたし

ましたが、どの先生もいきいきとして健康そのものでした。自信をもって子どもとどきくんでいる姿として、私たちもおおいに学ぶところがございました。

大きな自然の中で育てることの重要さも、経済成長を進める前に、教育が第一義として、大きくとりあげられていることは、大変うらやましく思いました。

最初の訪問園ロンドンの幼稚園 (House on the hill) を訪ねました時は、雲一つない晴天の日でしたので、木々の緑も美しく、咲きみだれた色とりどりの花が、訪ねる人の心をなぐさめてくれるようにさえ感じました。家庭の延長といった感じの門をくぐって小高い玄関に入りますと、すぐ保育室が二、三続いて並んでおりました。その陰の台所に、整頓された調理の品々が清潔そのものといった姿で並んでいたことも、印象深くながめました。庭の施設も、ブランコ、スベリ台、小さな砂場程度でしたが、子どもたちはそれぞれ思い思いの場所で楽しそうに遊んでおりました。

そこに入園してくる子どもたちは選ばれることなく、五十人に対して十七名の先生が指導にあたっておられるとのことでした。小学校とのつながりの上にて、まともになっているとのことでした。金持の家庭の子どももいれば、保育料を払えない家庭の子どももお話でした。施設は完全ではないが、あるだけの経費でまかない、寄付などでなんとかやれるとのことでした。

給食は一食について五シリング、日本円で二〇〇円ということでした。先生の俸給は二〇ポンド〜二五ポンド(資格をもった先生) 助手は一〇ポンド(一週間) 政府機関は五ポンド、十八歳で高校を経て、三年間幼児大学に学び、資格を得て specialist として指導にあたるということでした。

一般教養としてお互いに人見知りをして、ないように育てることが目標であって、しつけの点においても、家庭教育の中で幼い時からゆきとどいて指導されていることが、見学しただけでも、よくわかる

ように思いました。次に教育内容として、モンテッソリーの教育の中に遊びを加えているとのことでした。くだものであれば、早く熟すものと、おそく熟すものとのあるように、無理のない教育こそ、やがては大きく大地に根をはって、しっかりと芽がすくすくとのびて、美しい花を咲かせてくれることと思います、その日を持ちわねるように、力強い言葉で話された園長の言葉も意義あることとおもいます。

一步町に出ますと、古き時代の名残りをいまでもどめているかのように、聖パウロ寺院、ウエストミンスター寺院、大英博物館等、偉大な歴史を数々残して、そこを訪ねる人々があとをたたないといふことでした。

ホテルからはほど遠からぬところに、ケンシントンパークがありました。うっそうとおい繁った森のような中に、美しい花と噴水が石畳みの道をはさんでふと目にとまりました。緑のじゅうたんをはりめぐらしたように、小高い山も一面に包

んで、秋の日がてり輝いていたあの美しい一幅の絵は、頭から離れることなく楽しい思い出となって残ることでしょう。静かに編物を染しんでいる婦人、老夫婦が二人で新聞をひろげてめがねごしに見ていた姿ものどかに感じました。

英国に別れを惜しみながら、次の訪問地パリへと向かいました。天候に恵まれた空の旅は、何の不安もなく、快適そのものでした。ホテルについて間もなく十四年前の教え子の訪問が旅のつかれをいやしてくれました。

パリでは幼稚園が夏休みであったため、見学は残念ながらできませんでしたが、文部省最高官の職にいらっしゃる M. Thomas 氏の熱意あふれる講演は幼児教育を知る上に大変参考になりました。

「今フランスにおいて、この小さな子どもたちに何をしてあげることができるでしょうか？ それは幼児教育全体の責任です」といわれたあの力強い言葉は、いままも心打たれた言葉として忘れることができませぬ。

社会がやるべき教育的な仕事は、よいフランス語を教えることが最大の目的であって、母国語が最も重要であることに気がついて、最初の教育にかかっている。それをまじめに考えるようになって、イギリスやドイツに関係あるところでは、外国語も教えている。教育的な教育はすべて無料であるということでしょう。二歳から六歳までは、義務制ではないが、学校に続いているので統制を受ける。しかし自由に独立してやっているのが現状であるとのことでした。

国があらゆる教育問題に関心をもって、いること、たとえば芸術教育の中に絵と音楽と詩が含まれていて、詩はわからなくとも聞いていればわかるということでした。絵の教育もデッサンを主として、このように書きなさいというのではなくて、自由表現をするという方法でなされている。音楽は自分が聞いてわからなくとも、第一級の音楽を聞かせることによって、子どもの耳の教育といっしょに、歌をうたったり、美しい音楽を味わうこ

とができる。そこでリズムを感じとることになる。

次に、身体の教育に力を注ぎ、子どもたちの医学的な検査が一人の園医によって責任をもってされる。その状態は家庭に知らされる。第二の目的は、十分に息を吸って、呼吸をすることを教えるなど、自分で自分を鍛えてゆく方法が指導されていることなど、いろいろな面で学ぶところがありました。全ヨーロッパを支配したフランス文化の誇りが脈々と流れていることと結びあわせて、教育の面でも十分うかがうことができました。

ミロのピナナスを見るべく、ルーブル美術館を訪れました時、ひきもきらぬ観光客の中に、カメラを肩にした日本人の多く訪れていたのに驚きました。特に人気がある、「モナリザ」、「おちぼひろい」、「晩鐘」など多くの名作の中から、これだけをと、必死になってみてきたこともすべて生涯の思い出となってなつかしく残ってゆくことでしょう。美術を愛する文化、伝統、最高といわれているステ

ドグラスをシャトル大聖堂ノートルダム寺院に見ることのできた時の感激や、ジャンゼリゼのネオンの輝きを楽しみ思い出として、ジュネーブに向かいました。

さらに西ドイツツィムンヘンでの滞在も忘れたい思い出がありました。第二次世界大戦後の復興はまさに、驚異と聞いておりましたが、教育のためには国が大きく援助の手をさしのべているというので、創立六年目というカルハイツの幼稚園を訪ねました。ここでは、幼稚園と小学校との併設による総合教育がなされていて、フレイベルの教育が織り込まれていることが設備の上でも保育内容においてもかがわれました。

バスを降りて間もなく、広大な森が目の前にひらけて、私たち一行を喜ばせてくれました。年輪をへた古木が横たわり橋を作り、スベリ台となり、ジャングルジムとなり、大きなふし穴の中に女の子が小さくからだをかがめて、本を見ておじいさんの方を向いて、手を振って

いた平和な姿を、ここに見ることができました。戦後のドイツ国民の人間生活上に求めている風景として、あかずなめたことでした。鉄筋の園舎が見えたかと思うと、自転車で通園している親子づれに出会いました。そこで母親だけが自転車から降りて、園児だけそのまま走り去って玄関に消えていったのも印象的でした。

保育室ではあまり活動的な面は見学できまわりましたが、ふと窓越しに眼を向けると、朝の日差しをあびて十人あまりの子どもたちは元気よく、民族衣裳をつけた若い美しい先生を中心にして、ゲーム遊びに興じていたことでした。保育室には、フレイベルの恩物がならべられ、机の上に、洋だこが二本の尾に色とりどりの蝶を結びつけてあった、あの交互の色彩にも日ごろの保育が感じられました。子どもの活動している姿が見られなかったことが残念でしたが、このたこも近いうちに、子どもたちの手で空高く舞

いあげられることを心にえがき、名残りを惜しみながら次の訪問地ザルツブルグへと向かいました。

途中チロル地方の田園風景を満喫し、長い長いバスの旅もあきることなく、インスブルグ、ウィーン、ローマと忙しい旅程もつつがなく終えることのできたのも、心一つにして進もうとしていく保育者の情熱が、一人一人守ってくれたことと信じております。

まとまりません記録でおはずかしく思いますが、つたない筆をとどめさせていただきます。

(十文字幼稚園)

五歳児を 卒園させて



青 木 秀 子

三月に入り、おひなまつりを終えたあとは、朝から晩まで、ただひたすら、たくさんの事務をこなすこと、その中のアルバム作りを通し、一人一人の子どもを心に刻むこと、その子どもたちの表情の変化から、自分の力の足りなさを反省すること、に終始していた。

だから、三月十九日、卒園式。何となく、スポッときたという感じである。でも、卒園式も終わり、へやに戻って、いざ子どもたちに何か一言いおうと思ったとたん、声がつまってしまった……。続いての謝恩会が始まって、どことなく元気がでないでいると、「先生、元気だしてよ」と励ましてくれる女の子たち。また、会も終わり、ほんとうに園を去る段になって、玄関までじっ

と手を握って、一言もなくひっぱっていく男の子……。

就職してこの二年間、いったい何をのぞんで夢中になってやってきたのか、具体的な形ではわからなかった。でも、今こうして、あの子の声、この子の手のぬくもりと、一人一人の子どもの、また親との心のつながりを感じる時、私は、これを求めているのだ、とわかった。また、今までの幼稚園の生活は、そのつながりの上に流れてきたことも、あらためて感じている。

二年前、その時の私は、机上の勉強のみを続けていても、これ以上何も生まれてこないし、どこかおかしき世の中を、少しでも変えていくことはできないかと、生意気にも考え、まったくの鼻

息だけで、現場にとびこんだ。その私が、折々ぶちあたり、教えられ、つかんできたことを綴っていきたいと思う。時には、子ども側の側によったり、おとなの側によったりで、筋は通っていないかもしれない。しかし、その時々、私を強く支え、占めてきたことがらなのである。

●四歳児一学期から

三年保育からの十五名と入園したての二十名。しかし、私にとっては、皆、新しい。活発に動きまわる子は動く。動かない子はじっといすにすわっている。集まって何かする気配がないと、「何もしないの。じゃきよなら」と外のくつをかかえて帰ろうとする子を、あわててひきとめ、廊下にひっくり返り「おばあちゃんに、でんわしてよ——」と泣いている子をなだめすかし、抱いて、あちこち歩きまわって暮れた一日。

そんな中で、それまで快調に遊んでいた子が、朝、母親のあとを追うようになってしまった。しかし、きょうこそは私の方を向かせるんだ、と決心していた。案の定、母親のあとを追う。しかし、ぎゅっと抱いて離さない。むこうも抱いた手にかみついていた。それでも離さないと、力いっぱいかみついて、もうこれで……と思ったのか、かみつくのをやめた。私の手に、赤くはつきり歯あとがついた。それを見たその子は、からだの力をスーッとぬ

いた。しばらく抱いてブランコにのったりしていると、自分からおりて、遊びにいった。少しして「せんせい、えのぐしたい」といつてきた。前日まで私に、「お姉ちゃま先生(実習生の呼び名)ねえ……」と話していた子である。やっと私も「先生」に昇格した。

このように、子ども一人一人と、いろいろな形で、関係をつけていく中で、子どものことば一つ一つに、それまで身構え緊張していた私が、一つ一つ解きはぐされていくのを感じ、会う人ごとに「人間とつきあうってすごいよ。ねえ聞いてよ」と話したくなる気持になっていった。

また、母親に話をするということ一つをとっても、実際に子どもと生活をともにしている立場にあるものなら、私のような新米のいうことでも、耳をかしてもらえらることも経験し、その喜びと責任とを感じた。

●四歳児二学期から

そろそろ、いろいろな課題が入ってくる時期になってきた。

「運動会」もその一つである。皆でするお遊戯を、覚えてもらわなくてはならない。しかし、子どもたちにとっては、運動会とは、そのお遊戯の中での自分の位置とはと、全体の中での自分がつかめていない。そんな状態の子どもたちに、無理なく覚えても

らうことを考え、先輩の先生に学びながら、とりくんだ。

時間をかけ、環境づくりである。お遊戯にしているものを作ったり、レコードを他のレコードにまけてかけたり、誰かが「なに、これ」ときたら、先生と一緒に動いたり、お遊戯の順序でなく、それをつくっている動きはできることを確認したり……である。そうしたことから、運動会のふんいきをつくり、合同練習を待った。

合同練習の日、初めて順序を追い通してやるのを見、先生についてやった彼らの目の色は、真剣だった。そしてその後何回かの合同練習で、運動会を子どもに興味の山にもっていった気がする。

運動会、いえそればかりでなく、いつのまにか子どもからとび出し、浮かび上がったものを、再び子ども達の生活の中に入れ、本来に戻すことの可能なことと、またそうしなくてはならないことを、しみじみ考えさせられた。また、幼児教育ですべき「人のいうことをきく時は、真剣にきく態度を育てる」とはこのことなのかと、すんだあとで結合したものである。

また、ちょうどそのころ、お山のイチョウを切らなくてはならない、という問題がおきた。これは、結果的にはいろいろな方のご尽力で切らずにすんだが、その時の私は、「これは子どもに大切なものだから、どうぞ切らないでください」ということを、自信をもっていえなかった。むしろご父兄の方々が「何とかして

ください」という声を、純粹に子どもの側に立って、あげられた。はっきりいえば、私は何もできずに終わった。イチョウは守られた。

でも、その後、ほっとした顔のイチョウの木の下で、子どもたちがままごとをしていた。穴を掘り、ぎんなんを捨てるのが二、三人に見られた。そのうちに、毎日、登園するやお山の上に乗って、お弁当までおりてこないことが続いた。

ジャングルジムをベッドにし、石や、木、草、かわらの焼けのこり……全部生かしてのままごとである。草をしき、木をくべ、車のタイヤのはずれたのをかまどにし、ふるいのおなべをかけ、かわらのやきいもをつくっている……。ごちそうができ上がる、固定円木のバスにのって「〇〇ホテルいき」である。八人ならんで歌をうたい、お出かけしていた……。

これを見た時、イチョウに限らず、草や木石のあるところが、子どもにどんなに大切かを教えられた。保育用品とは、これなのではないかと思う。また、子どもに本当にいるものは何なのか、それを子どもにわかって声にしなければならぬのは誰なのかを教えられた気がする。

●四歳児三学期から

幼稚園にも慣れた子どもたちは、ありきたりの遊具でなく、何

かになったつもりで、友だちと遊ぶことがふえてきた。二学期のころから「チョウウチョの羽つくって」とか、「ウサギごっこよ」と耳をつけたり、レコードで楽隊をしたり……が出ていた。しかし、その断片的な小さな活動を、それ以上どうしようということにも気づかず、考えず過ごしていた私だった。

ある時、実習生の研究保育で、他のクラスを見る機会をもった。その時、同じ小道具をつけ、ダンスレコードで、いきいきと踊っている子どもの姿を見た。はっとさせられた。子どもの出している芽に気がつかないで、それをみな枯れさせて平気できたのではないかと。これが、いつも先輩の先生からいわれていた「遊べるようになった次の段階での指導が大切。そこからがはじめて幼児教育のプロの人間にしかできないこと」なのだ知った。

自分のへやに戻り、子どもの引出しをそっとあけてみると、チョウの羽が、たたまれて入っていた。……その子にそっと、わびたい気持だった。

私もレコードを捜し、かけてみた。しかしまた、そのレコードが問題なのだということを知った。子どもの動きにあうレコードはどれなのかを知らず、バレーレコードを選んできても動けないのである。保育者は、保育技術をもたなければ、子どもに満足を与えることはできない。一緒に生活していくことはできない。レコード一つ選ぶにしても、その知識がなければ、子どもと一緒に

踊るにしても、そのからだに付いた動きがなければ……。保育技術が、子どもとの生活のどこで入用なのかわかってきた気がした。鼻息だけでは保育はできないことも……。

二月、三月と、やはり今までの指導の不足からだろうが、子どもたちの生活があれ、そこから親の間にまで混乱をおこさせてしまった。間接的にだが、いろいろなことを耳にし、私の信じてよいものはなくなっていた。一年間やってきたけれど、もうこれ以上続けるな、ということがいわれているのかもしれないも思った。「やめたら負け」と自分にむちうってみるが、やはり立ちはがれそうもなかった。

そんな時、終業式のあと一人の男の子がそばにきて、「うみの組になっても、同じ先生いる？ せんせい、いる？」と見上げて聞くのである。すぐに返事はできなかったが、腹をきめ、「いるわよ、先生だって一緒にうみの組になるのよ」というと、安心してように笑って帰っていった。

この子どもの言葉で、私はもう一度、いろいろなことを考えなおし、もう一度やるんだと思った。小さな小さな子どもの言葉をも、大事にして、次を考えることをしよう。

●五歳児一学期、二学期から

いやでも何でも、実質が伴わなくても、五歳のうみの組になってしまった。しかし、大きい組になったということで、皆の意識も変化をみせはじめ、落ち着きがみえ始めた。私自身も、子どもとの歩調があう経験によって、救われていった。

二学期に入ると、子どもが何かを始めたら、そこへ行っているをみて出すと、おもしろいように吸収していつてくれる。男の子も、とびまわるばかりでなく、いろいろつくることが出てきている。(十月)

「大きいハコない? 大きいのに、このくらい」と相談にくる。さすがすと、一つダンボールがみつかる。「きかんしゃつくるのよー」といつている。さてどうなるものか……と見守っていると、窓と入口を切つて、その中に入り、機関士になつてゐる。他の子どもたちも、入れかわりたちかわり入り、楽しんでゐる。一週間ほどそうしてゐるので、私も、『消えゆく蒸気機関車』などの話題もとびかうころだったので、本をもつていくと、何人かの子も、交通博物館のパンフレットをもつてきた。

機関室にあうくらいの筒をつくることを考え、白ボールを二重にし、円筒にし、ポイラーをつけた。ガムテープでベタベタはつてもらい、さて車は?というところ、彼らは専門家、DCIだから四

つだという。そして「走るのにする」「のれるの」と夢は、見通しは大きい。しかし紙なので、のるのは無理。だから引っぱるか、押すことで妥協してもらい、板組木の車をつけることにした。

何日もかかり、やつとのことで車をつけ、皆で色をぬると、機関車らしくなつてきた。「こんどは、ピストンね」とニコニコしている。ピストンといわれても、どうしたらよいかと困りはててゐると、家から角材とロッドピンの形に切つた板をもちこんできた。朝、廊下をヨタヨタ、四本の角材をかかえてくる彼をみると、何ともいへぬ気持ちがかみ上げてきた。

せっかくの木のパistonは、どうしても重くて無理。やつとボール紙にワリピンのピistonを思いつき、満足してもらつた。

その間、一ヶ月余、本を読んだり、ミニチュアの機関車をつくつたり、設計図と称して絵をかいいたり……だつた。また石炭貨物車も、何もいわなくとも他の子どもが作り出してゐた。

この活動から、毎日、機関車、機関車と考へてくると、子どもも考へてくる、というかけあいを味わい、子どもが「先生は、ほかがないと何もできないんだね」と肩に手をおいて、しんみりいつた言葉がうれしくもあつた。

この活動のあと、ああ五歳になつたんだな、という感じを味わつた。そして、子どもを手中に入れようとは思わないうまでも、一

緒にやりたいという気持ちになれた。

かねてから、大自然の中に子どもを帰そうという園長先生のお考えを、何とか具体化したいと考えていた。あちこち捜してみるが、もう東京都内にはこれぞと思う場はみあたらない。年長組だし、思い切って秩父の方を考えた。

電車の手配もうまく都合が付き、防げる事故はおこしてはならないという緊張のもとに、その日がきた。

絶好のお天気！ 芦ヶ久保の駅をおりと、山からのふきおろしに落葉がおどり、まっさおな空、まっ白な雲、まっかな柿の実と、下見の時以上に、秋が待っていてくれた。

「雲に近くなるみたい。おーい、雲くん、会いにきたんだぞーどこへいくんだい」こんな言葉が、思いもかけない子の口から出てくる。また、付添も五人と最小限のためか、子どもも「やって」という言葉もなく、自分たちで考えて、工夫してすることがみられた。

帰ってから、どこかふんいきにはりも感じられ、また、一人が山のぼりの絵とってかき出すと、皆がかき出したのにはびっくりさせられた。

都会の幼稚園は、園のただけについては、片手おちの保育になつてしまふのではないかと思う。

また、まきを自分たちでつくって、おもちつきをする機会にも恵まれた。

二学期……何かいわゆる幼稚園的にまとまった大きな活動の可能な時だろうが、それをやめ、山のぼり、労働……としてみて、都市の幼稚園の子どもに必要なものは、上品なうわべだけのものではなく、人間としての本当の上品さを育てることだ、ということを知った。それをどれだけ、あの子たちに実現できたかわからない。しかし、子どもを青い空の下に連れ出すことで、目の輝きも、言葉も変わることは確かだった。

●五歳児三学期

幼稚園生活の最後にさしかかり、それまでいろいろと手をやき、なやんできた子にも、グンと落着きが見えはじめてきた。お友だちと、いっぱい遊んでおきたいという気持はどの子にも強くみられる。

そんな中で、おひなまつりの集まりをして、年少の子や、母親たちに楽しんでもらうという、年長組の恒例行事が近づいた。

全員が出られ、うたも踊りもお話も、総合していけるもの、それまで日ごろ遊んでいたもので、という線で、だしものをきめていった。

しかし、皆友だちと遊びたくて、そのあい間をぬって、小道具

を作ったり、言葉を考えたりという調子だった。しかし、日もせまり、自分の役がはつきりし、具体的にどうする、ということがつかめてくると、こちらを向いてきてくれた。そして、練習の時ゴタゴタ問題をおこしていた子も、当日は一生懸命やってくれた。

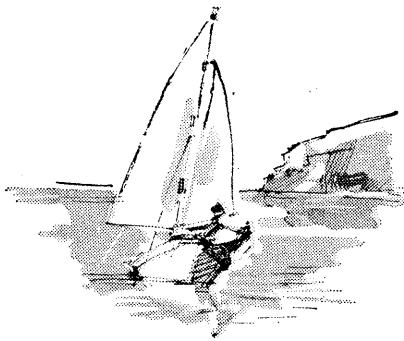
この、子どもにとっても私にとっても大きなとりくみは、いろいろなことを教えてくれた。自分の身についたもので、日ごろ、存分に動いて保育していなかった、ということ、(先生がやらなければ、子どもから出てくるものには限度がある)また、お互いに人のすることを見たりする時の態度という、しつけの面でも欠陥のあったこと、……など。

幼稚園という、人間が生活する場においては、私自身の生活態度なり、保育技術なり、心のあり方なり、私のすべてが、ごまかし、かくすことが許されない状態に追いやられた。「もっともっと動けば、もっともっと子どもと密接になり、そうすればそこで見えてくるものがある」と先輩の先生にいわれた。その言葉をかみしめながら、二年間のこと、それ以前の私の生活を思い返している。

二年間、まわりの先生方から、いろいろ助けていただき、教えていただいた。また、あの卒園していった子どもたちからも…。

私に最大の贈りものをしていってくれたことを思うと、ただ、多くの犠牲を強いてきたことをすまなく思う気持ちでいっぱいである。

今は、次にもたせていただく子どもたちには「あの子どものもつ目の輝きをつぶさないように。さわやかな心で、子どもに体当たりしていこう」など考え、あの手ぬくもりと声が、この私の気持ちをささえてくれている。(お茶の水女子大学附属幼稚園)



日本は間違った方向へ歩んでいる



羽田令子

お茶の水女子大附属幼稚園の志願者、一、五三〇名の「チューセン」の日は、皮肉かどうか「立春の日」。羽田令子さんの十枚（原稿用紙）のこの手紙は、その日に私の園長室に送りとどけられた。

私は「いらいら」と「悲しさ」の中で、その手紙を読んで、一種の「啓示」のようなものを読みとった。「立春」が、いまの日本に精神の問題としてあるのか？ 羽田さん当人の考えがどうかは別として、ともかく、みんなが読んで考えてみるべき日本人の問題が、ここにある、と私は思う。

（周郷博）

二、三日前に降った雪が、山ひだや庭の片すみに残ってはいませんが、きょうは朝からいっばいの太陽、空の青さ、当地は公害のない側の富士山麓、美しい日曜日の朝、突然この便りをしたためる決心をいたしました。

突然の無礼をお許し下さいませ。私、平凡な二児の母、そのなかの下の子のために、貴校の幼稚園を志願した者でございます。

実は、長男の学校の関係で今春上京いたしますので、次男(四歳)にも幼稚園を求めています。その理由や内情は、長男のことから書かなければなりませんので、お聞き苦しいことかもしれません、どうぞお読みになって下さいませ。

三十八年から四十二年にかけて三年余、私も主人の仕事の関係でブラジルに住みました。そこはブラジル北東部にあるレシフェ市、ブラジル文化の発祥地とでも申しましょうか、中世期に繁栄した街で、今でもブラジル第三の都市(人口百万)です。

日本人が非常に少ない関係で、日本にはあまり知られていませんが、南部のリオ、サンパウロにくらべて工業の遅れがあるもので、主人は外務省から派遣されて、技術指導に行っておりまして。その地には頼れるような教育機関は、アメリカン・スクールしかなく、学齢になったとき、その小学部へ入りました。家で両親とは日本語、外でブラジル人の子と遊ぶ時はポルトガル語、さて、今度は学校の門をくぐった途端、第三言語の英語になるわ

けで、心配しましたが、間もなく慣れてくれました。一ヶ月目に担任の教師から「きょう、はじめて、Kちゃんがイングリッシュで私の名を呼んでくれました。うれしかったわ」という報告があった時は、私も共々涙が出そうに嬉しいことでした。その学校は、八割がアメリカ人、あとの二割が日本人その他の、外国人の子弟が在籍しておりました。長男のクラス(一学年一学級)はもちろん、日本人が自分一人、ハイスクールまでで、日本人は私の家庭を入れて計三家庭が子弟を送っていただけです。

ブラジルは想像していたより住みよい国で、人種差別は全くなく親日感ももたれているので、のんびりした毎日でしたが、アメリカン・スクールに入れるに当たって、もしかや、という杞憂がなくなかなかたのですが、入れてみてそんな思いは全く消えてしまいました。子どもの順応ぶりを見ればわかります。外人の子らとなんのわだかまりもなく遊びまわっておりまして。一ヶ月間黙っていた子に、「なぜ黙っているの」とか「なぜ英語を話さないのだろう」などと、教師は詰問することなく、はじめて「ミス・〇〇」と呼んだ時、しっかりと受けとめて認めて下さったことはすばらしいことだと思います。

長男は南国の太陽をいっばいに受けて、真っ黒く丈夫に育ち、帰国いたしました。主人は会社に戻り、すぐに任地の静岡県浜名湖畔の工場へ勤務、子どもはそここの小学校へ編入いたしましたし

た。アメリカン・スクールでは一年を終わり、もう一期、言語を完全マスターするために、一年をくり返しておりました。そのため私たちは、一年下げて編入を希望したのですが、学校の都合もあってか年齢相当の学年（当時、二年の後期）へいきなり入れられました。

わずかに三年余りだけなのに、日本語は二世のようになってしまい、私も、アメリカン・スクールに慣れさせるため、無理に日本語を教えるはいけませんでしたので、ひらがなをたどたくしく読む程度の学力でした。かてて加えて、はじめて見る日本の学校、「気をつけ、礼」からして知らない習慣、あちらでは、小学校低学年はやさしすぎるほど、くり返しくり返しやっている教育内容なのに、毎日どんどん飛躍していく教育方法、子どもには何もかもショックで大変のようでした。

二年弱で現在の所に主人が転任になったので、転校の際、思いきって空白の分、二年下げて編入させていただきました。あちらでは、留年や飛び級は自由でしたので、年齢は揃ってはならず、机やいすが、子どもの体格に合わせて、高低さまざまでしたほです。が、日本の文部省のように、年齢で学年を区切り、出来ようが出来なからうがどんどん押し出していきやり方には、長男の場合、私も両親としまして、どうしても当てはめたくありません。

さて、帰国してもう三年もたちましたが、当時、いたずら帳へアルファベットを並べていた子が授業に追いついていけるほどになり、出発を遅えて日本の子らにごした息子としては、格段の進歩と思いますが、その反面、いつの間にかすっかりゆううつな子になってしまいました。熱帯の太陽の下で、美しい大西洋で、元氣いっぱいだった我が子、帰国の時、あちこちの空港で外人のおばさん、おじさんに「ぼく、日本へ帰るんだよ」と英語でそのうれしさを語っていた子、飛行機の中では、白人、黒人を問わずすぐ誰とも仲よしになり、長い道中、退屈せずに、楽しく過ごしてきた子、あの姿とはうらはらな状態を見るにつけ、私の心も真っ暗でした。

原因はいろいろあります。その一番大きな原因は、おそらく学校が楽しくないこと、だからでしょうか。いきなり二年後期へ入り、すぐに三年に進級、帰宅は割合遅く、帰れば重い宿題（先生と相談して軽くしてもらってはいましたが、それでもあの子のベースでは負担でした）、ほとんど遊ぶ時間などありませんでした。学校ではテスト、テストの連続、子どもたち同士、点数を気にし、先生も長男に「もう慣れてもよいくらなの」と欠点を拾い、いつの間にか、長男にとって、日本の学校とは恐ろしい所、というイメージがこびりついてしまったようです。

今まで内外を通じて転校を重ねたため、計六人の先生に受けも

たれておりますが、貴重な体験のおかげで、平凡なこの母親の私に、教育とは何か、というものに対して机上では得られなかった、具体的な答を引き出すことができそうです。そして次のような考えを抱くようになりました。

一、子どもにとって教育の場は楽しい経験の場であること。そのためには、子どもの発達段階に応じて行なわれなければならないと思います。また、詰め込み主義、おしつけ主義でなく、子どもの興味や発達をひき出し、助長するような方法で行なわれなければならないと思います。

一、教師は子どもに愛情をもつこと。そのためには信頼することです。（言語が通じなくても愛情で教師と子どもは結びつきます。）ある時は子どもの線にまで下りて、物事を考えたり、学んだり、教えるしなければならないでしょう。いかなる時でも、愛情と信頼を失わないことです。そうすれば「なぜ、わからないの」の「う」。「なぜできないの」などという馬鹿げた質問をしなくなりません。

一、教師の人格は円満でなければなりません。

私は教育技術にすぐれた教師よりも、まず、その人となりや優先します。いくら壇上でうまい教師でも、愛情に欠けた所があったり、狡猾な所が見えたり、へつらったりするような人格では何もありません。むしろ、少々教え方は下手でも、心の優しい先生

の方が、子どもがしたうでしょう。

そのためには教師となる人は、円満な教育を受けなければならないわけで、ペーパー・テストができただけで卒業してきたり、ガツガツして過ごしてきた人が教師となるのは真つ平です。大学へ入ってこそ、きびしい学問をしなければなりませんし、精神的にももっと豊かに過ごしていただきたいと思います。（こうなる」と、また教育論に戻り、教育とは……云々を第一歩から考えていかなければなりません（……）

かように母親として得た体験からさえ、教育に抱く考えは尽きないものになりました。このような考えをめぐらしていた矢先（昨秋）主人の本社転勤が四十六年度中にあることが確実にわかりましたので、昨秋は折ある度に上京し、私は長男に合った学校をさがして歩きました。そうして、ある学校で私の考えを聞いていただき、子どもを受け入れていただく段になりました。子どもに対して、暗い少年時代を送らせたくない、子どもは子どもらしく過ごさせたい、せめて小学校時代だけでも楽しい日々が送れるように、私の願いは、切なるものがございます。

主人の転任は今年半ばになりそうなので、私たちは先に上京の子定、桜の咲く新学期から区切りよく転校させたいと思います。ところで下の四歳の子の幼稚園を年が明けてから真剣に考え出

し、さがしましたが、なんとこの人口過剰な日本では、幼稚園から狭き門、私立は皆、十一月に募集を終わっていることを知りました。そこへ偶然貴校の募集を知り、応募しましたわけでございます。受付へ行ってさらにびっくり、時間びったりにかけつめた私よりも先に、大ぜいがひしめき待ちかまえていたではありませんか。

文部省の悪口をいっておきながら、文部省の管轄下にある学校へ志願しているわけですが、私は、前に先生の著書を読んだことがあり、さわやかな印象をもっております。また、長男が在学している町立のような学校と違い、上からの命よりも、園長先生の考えが反映した独得の線を歩んでいるのではないかと、私は考えをめぐらしております。とにかく、私が次男を送りたい学校は貴校しかありません。

受付で、教育ママたちの中に並んで、私にはもっと切実な願いがありました。それは、稚拙ではありますが、今まで走り書きしてきた願いをこめて、次男に貴校を求めております。が、受け入れていただくことはなんとほかない望みでしょう。抽選に当たらなければダメなのです。それに昨夜からわが子は風邪で熱を出して寝込んでいます。もし、明日中に治らなければ、私は上京不可能になってしまいます。私の子どもは、判で押したように、きちんとした子ではありません。わんぱくで、面白い子で

す。でも人の話はよく理解できません。顔が優しい顔つきなので、いくら黒っぽい服を着せても女の子に間違えられることがあります。先日もし知り合いの奥様が優しく、「あなたおじょうちゃん、それとも男の子？」と聞いたら、「バカ、男だ！」と男らしい返事で、皆を笑わせました。

この子が貴校の抽選にはずれたら、上京しても（下落合転入予定）、四歳という貴重な年齢をぶらぶらしていなければなりません。（もう他の幼稚園もいっぱいなのですから）。

私は外国かぶれしてきたわけではありませんが、日本の社会のしくみは何とゆがんでいることでしょう。日本は間違った方向へ歩んでいるとしか思えません。

以上僭越ではございますが、我が子を貴校へ志願した母親としての願いを、先生に聞いていただきたく、急ぎよペンをとりました。清書をする時間もございますので、このまま投函します。乱筆をお許し下さいませ。

誰よりもまして強く、わが子をよい経験の場へ送り出したいことを願ってやみません。

羽田 令子

周郷 博先生

こんな本
あんな本

「くまのパディントン」ほか

マイケル・ボンド作

ペギー・フォートナム画

松岡享子訳（福音館）

菊池百合

「パディントン」それはロンドンの駅の名です。しかしこのパディントンは暗黒の地ベルーから密航して来た小ぐまです。パディントン駅で奇妙な札を首からぶらさげてうろろろしていた時、偶然ブラウンさん夫妻に出会いました。そしてブラウン家の一員として暮らすことになりました。

パディントンのいるところ必ず珍事件ありというくらい、次々に愉快なことが起きます。パディントンが慎重に計画して真剣に行動すればするほど、おかしなことになってしまうのです。一度パディントンに出会った人は、どこまでもパディントンを追いかけたくなるようなたのしい話です。

この本は幼児に読んであげるといふ点では不適當です。それでもあえてここに紹介したのは、保育する人が幼児を理

解するヒントを含んでいると思うからです。

◎パディントンの行動は、幼児の行動と共通する点が多くあります。

ママレードの大好きなパディントンは、ひげや手についたママレードをふこうとしますが、かえってあちこちにベトベトついてしまい苦労します。本人はいつしようけんめいしているのが、他人からみるとどうも奇妙にうつることがあるものです。

◎ブラウン家の人々は、パディントンといっしょに生活するうちに、扱い方をのみこみます。

なんともいえぬ妙な表情を浮かべている時は、何を聞いてもむだなのです。そんな時、パディントンはブラウン家の人を喜ばし驚かさうと創造力をせっせと

働かせているところなのです。その結果は必ずしも計画通りとはいえません。しかしそれでよいのです。ある日旅行日程——パディントン風には料行日底——を作りつつ地図の上にママレードのオレンジの皮をこびりつけてしまいました。いざ目的地をめざした一行は、変な所で曲がってしまいました。失敗のうめあわせに心をつかうパディントンといささか不満なブラウン家の子どもたち、なだめるブラウン夫妻。しかし思いもよらぬところで予想もしない楽しい経験をしたりします。

子どもの遊びの中には、偶然に生じた活動が非常に子どもの興味をひく場合があります。

◎ブラウン家で暮らすうちに、パディントンの行動範囲が広くなり知人も多くなります。特に骨董屋のグルーバーさんと

は毎日「お十一時」にココアを飲み、菓子パンを食べながらおしゃべりを楽しみます。また、お店のことでよくグルーバーさんに前足をかしてあげたりします。パディントンはある日グルーバーさんにつれられて、せりに行きました。だれもかれも親しげですので、帽子をふったり前足をふったり挨拶をしていたつもりだったのが、実は高価な大工道具を買うためになっていました。また、ママレード入れに、銀器をただ同然で手に入れたりもしました。

パディントンは、このようなできごとを連発させては読者を楽しませてくれます。これらのできごとは単にパディントンという小ぐまの経験であると決めつけてしまう前に、保育室にいる幼児たちの日常生活での経験でもあると思いたいのです。

おとなどは違った考え方、感じ方で生活している子どもたちの姿でもありまよう。また、少しでもおとなりに近いことをしたいと背のびし努力している様子でもありましよう。それらを多角的にとらえて、いわば解説つきの描写をしている作者の心に共感し、学ぶべき点が多いと思います。

なによりも愉快な本です。楽しみ笑いながら読むことが、保育者の心の安らぎにもなるでしょう。一冊読み終わると、また、パディントンにあいたくなりま

す。
全八冊のうち、現在訳されているものは、「くまのパディントン」のほか、「パディントンのクリスマスマス」「パディントンの一周年記念」「パディントンフランスへ」です。

子どもの生きがい



晶 中 徳 子

おとなにとって、「生きがい」とは、生きる価値・目的など、その人がよりよく生きるための行動の目標となるものであろう。

子どもとりわけ、幼児にとつての「生きがい」が何であるのか。私たちおとなは、それを、どのように考えたらよいのであろうか。

母親が、自分の幼いころの体験を、四歳の子どもに話している。

子ども 「そのとき、ぼく、まだ、生まれていなかった？」

母親 「そうよ」

子ども 「そのときは、まだちっちゃくて、ママのおなかの中にいた？」

母親 「そうねえ……。おなかの中にもいなかったかな……」

子ども 「ちっちゃくて、いたよ!!」

母親は、子どもの真剣な表情に、何と答えてよいのか、一瞬とまどうが、

母親 「そうね。きっと、小さくて、いたのかもしれないわね」

子どもは、やっと安心したような顔で、笑う。

この母親は、なぜ、このとき困ったのであろうか。母親—おとながとらえている客観的事実と、子どものとらえている世界とのちがいが、ズレにとまどったのである。子どものこのような考え方を「自己中心性」とみることもできる。子どもにとつては、自己の存在しない世界など、考えられないことであり、自己があつてはじめて世界が存在するのであろう。

しかし、このことは⁽¹⁾「子どもが、関係的存在である」ことのあかしでは、ないだろうか。

子どもは、子どもであるとともに、父母があつて生存し始め、父や母—おとなとの関係で存在している。おとなによつて「子どもは、保護されなければ、存在することはできない」が、

特殊幼児の保育

河井祥子

私と障害児との出会いは、現在小学校三年に在学する二児でした。

一人はえりちゃんという自閉的な傾向をもつ子ども、もう一人は、脳性小児マヒによる肢体不自由のコウちゃんでした。入園当初のえりちゃんは、人の髪の毛を突然引っばったり、大きな声で泣きだしたり、子どもたちはもとより、私も教師が、あっけにとられるような目が続きました。

その中で彼女なりに特性をもっていることを発見したのが、六月になったころでしょうか。絵をかくことが好きで、一人黒板に向かって「あひる」の絵を「これはパパのあひる」「これはママ」というようにたくさんかいて楽しんでいました。

このように何か一つの安定した状態を見いだすと、お互いに安心感が出てくるようです。そのうち、クラスの子どもの中から、えりちゃんに、「怪獣エリゴン」というあだ名がつけました。なにしろ幼稚園の中を台風のごとく荒しまわっていたのですから。

男の子の友だちができました。親切な女の子も友だちになりました。落ち着いて、絵本を読んでというようにもなりました。

三学期の終わりには、クラスの子どもたちと共に劇の中で歌うたいました。一年は早いのですが、えりちゃんにとっては、長い最も変化の多い一年だったことでしょう。

こんなことから、障害児との縁が続くようになり、年々、自閉的傾向をもつ子ども、ちえ遅れの子ども、そして言語障害の子ども、というように、私たち、子どもたちの仲間が増えてきました。

次に特殊児の園生活を少し書いてみましょう。

自閉的傾向のある子どもの場合

はじめての出会いが、自閉的傾向をもつ子どもであり、それ以来、毎年そのような子どもたち数人を加えて生活するようになりました。そのうち小学校へ進学したものが三名になりました。

私たち送り出す者は進学先の学校について頭を悩ませます。それは園生活一年ないし二年の間に、自閉的傾向が大変少なくなっ

たとはいっても普通児と変わらないようになることはまれですが、なかなか受け入れていただけません。受け入れて下さった場合でも、その後のことが心配になってきますが、このことはまた、あとで書いてみたいと思います。

この子どもたちは、共通して子どもたちとの接触を好まず、自己活動がとて高いことです。

「オルガンが得意な子ども、何回か弾いてあげると、なに調でも弾きこなしてしまいます」

「マーク・字に興味のある子ども」

「正確な絵を好んで書く子ども」
などときまぎれですが、これらのことを媒体に普通児との関係をつけていく場合も多くあります。

けん君は、ほとんどの子どもが登園し終わったころ母親とやってくる、三歳になったばかりの自閉的傾向をもつ子どもです。この種の子どもに共通の対人関係が欠けている状態です。コート트를脱ぎ、カバンを置くと、一人で外へ出ていき、ドロコン遊びで彼の一日は始まります。やがて、砂を固めてボールを作っている年長児の中に割り込み、彼らが水を使ったり白砂をかけたたり一生懸命に作った宝物のボールを次から次へ取ろうとする、こわしてしまふ。そこで、このコワイ先生の目が光るわけです。ところが……子どもたちは先生より人間ができています。気前よくあげてしまふのですから……。

ここで一つ問題があるわけです。障害児の多くは、家庭で非常にわがままに育てられています。幼稚園においても、自然と子どもたちの間で過保護にされる傾向があるようです。そのような時、私たち教師は、子どもたちの間でより良い方向へカジをとっていくわけです。普通児の間で受け入れがうまくいけば、子どもたちとのつながりは、いやがおうでも強くなってきます。

けん君も毎日お弁当を持ってくるのですが、手をつけたことがない。ところがある日、女児からバナナをもらい喜んで食べる。次の日、暖かい日の光を浴びて、外にゴザを敷きお弁当を食べる。けん君のお弁当はバナナにふりかけごはん。「先生、けん君がごはんたべてる」という子どもたちのうれしそうなお声。けん君がはじめてお弁当を食べた日のことです。

そのあと、一人の男児がはずかしそうに私のそばにやってくる。小聲でささやく。「先生きょうもいいでしょう」「何が?」「けん君と手をつないで帰って」

途中入園のけん君、入園当時は、お友だちをつねったり、牛乳ビンを割ったりで、どうしたら子どもたちの中へ入っていかれるかと心配したのが夢のよう、約二ヵ月後の現在、教師との関係より早く、素直な形で子どもたちとのつながりができてきたようです。

この子どもの場合は年齢が低い(二歳児で入園)ためか、なじみ方が早かったようですが、一人一人、期間も、方法も異なっています。

いるようです。しかし、すべてこれら特殊児に伝えることで、が、まず教師の受け入れる心、ほかの子どもたちが受け入れる心がなにより大切のようです。

知恵遅れの子どもの場合

三学期に途中入園してきたみかちゃん(四歳児)は、三歳児の中でみることにしました。障害児治療センターの管理のもとで、少しずつ集団に慣れさせていこうというのが、母親と私たち教師との望みでした。最初のころは、一日中ほとんど動くことなくすわったまま、もちろんトイレへ連れていくこともできない状態でした。

一ヶ月もすると、三歳児の中の一人が、彼女のめんどろをみるようになりました。何のこだわりもなく話しかける姿を見ていると、何か治療の、また保育の可能性が見いだされるようでした。子どもたちのそのような働きかけから、だんだんと固さがとれ、遊びの中にも一応入っていきけるようになりました。言語の面でも「ママ」「イヤ」等のわずかな単語しか発していなかった彼女も、四月に入ると、言葉の数も多くなり、そのできごとに関する適切な表現もするようになりました。そして幼稚園での生活を、彼女なりに楽しみ、十分にからだを動かしていきけるようになりました。

普通児と同じレベルの遊びはむずかしいようですが、ほかの子どもの遊びを見ていたり、また、わずかな時間でも、仲間に入る

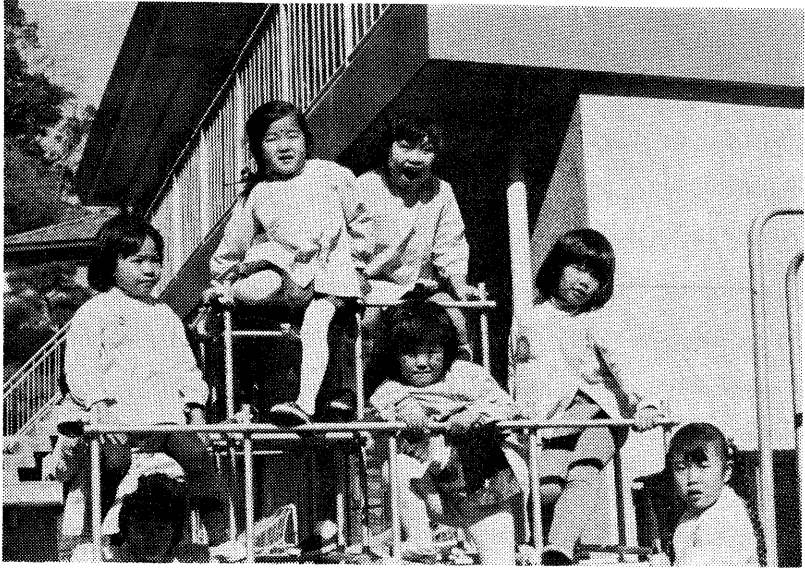
ことにより、学習し、生活範囲を広くしていった様子です。彼女にあだ名がつけました。あだ名も親しみのうちで、無視できない交流手段の一つです。彼女は「でぶミカちゃん」私は「デブ先生」、お付き合いであだ名をいただくのも楽しいものです。

こんなことで一年が過ぎたわけですが、彼女の変化は、知的な面ではあまり著しい変化はありませんが、社会性、運動面、情緒面での発達が大きい様です。この子どもたちにとって、隔離され、接触のほとんどない生活による遅れがみられます。その意味でも、暖かい心で受け入れてあげたいのです。この子どもたちの伸びる芽をつみ取らないためにも……。

身体的障害をもつ子どもの場合

私たちが扱った子どもは、先天性脳性マヒによる肢体不自由児で、ひとりっ子のため、親とのつながりが深く、自立が遅れていました。受け入れ側も、はじめ、十一月には自閉的傾向をもつ子どもが入園し、一人で行動しているのを見て刺激されたためか、親とも離れ、幼稚園生活を過ごすようになりました。手足が不自由なため、お弁当はなかなか上手にいきませんし、歩行もうまくはいきませんが、階段の上り降り、かけっこ、体操、お友だちと相撲をとったりなど、段々自信をつけていきました。

◆普通児の保育の立場から考えてみましょう。私の幼稚園でもいえることですが、特に私立の幼稚園では、ある幅の中—知的面



みんなといっしょ、みかちゃん（上段 右）

・環境面一の子どもの集団である場合が多いのではないのでしょうか。その面においても、身体的に弱い子どももいれば、精神的に弱い子どももいるということは、人間を幅広く受け入れる心を知っていくように思われます。

同じクラスの仲間意識は強く、障害児のできないことがあれば進んで手助けをするし、共に成長していこうという意識も芽ばえてきます。また、小さなできごとにも喜びを感じます。

ある日の午後、「おかえりのうた」を皆で歌っていますと、突然女兒が「先生大変、みかちゃんがいっしょに歌をうたっているのよ！」私には「よかったわね」としかいえない胸いっぱい喜びがありました。歌をうたってくれたのもうれしいけれど、それ以上に、それを喜んでくれた、やさしい心をもつ子どもたち……。また、三月に近いある日、女兒が「先生、すみちゃんとみかちゃんが学校へいくんだって」「そうよ、みんながみかちゃんたちと仲良くしてくれたから学校へいけるようになったのよ、よかったわね」男児「先生、でもみかちゃんたち、学校へいっておられないかな」「どうして」「静かにしていられるかどうか心配だよ」

私たちが考える以上に、子どもたちは仲間を思っていることに喜びを感じます。

◆父兄の立場

月に一度、親と教師との話し合いの場である父兄会を開きま

す。その都度いろいろな話が取り上げられ話し合っていていきますが、特殊児をもつクラスにとつて、中心はよくこれらの子どもが話題になります。今ままですと、子どもについての話題がどうしても子どもというものを素直に見ず、きぬを一枚かぶせた状態での話題だった様に思いますが、現在は、もっと基本的時点に戻って子どものほんとうの幸せは何か、目をそらすことなく話し合えるように思います。そして親自身も、現在の幸せをかみしめ、背伸びをすることなく、また、これら障害児をもつ親ごさんたちとも手をつないでいこうとしています。

自分の幸せばかりでなく、広い意味の幸せが考えられるようになったことだけでも、このような保育の取獲のように思われま

◆保育者の立場

障害児を普通児の中で保育することはむずかしい。しかしそれは、私自身がほんとうの保育についての勉強が足りなかったからだと思います。保育を正しく見つけていたならば、そして子ども

の心を受け入れる心をもっていたならば決してむずかしいものではない、ということ子どもたちが教えてくれました。障害児の心は純粹です。おとなに喜ばれようとか、おとなのきげんをとるようなことはしませんから。

この未熟な私が、何年か障害児と共に過ごすことにより、ほんとうの子どもの姿、幼児は何を求めているのか、これらの子ども

もを通して解ってきたように思います。保育というものが、そんなに表面的で簡単なものではなく、もっと深い所にあるのではないかと、それを、彼らに教わります。その中で、普通児と障害児との関係をつけていく。そこからの発見ということが出てきます。

けん君がおへやに水をまいて歩いている。けん君は水が好きでほとんど一日中水と付き合っている。その時、子どもたちがぞうきんでふいて歩く、そのうち何人かが同じようにぞうきんを持つてくる。そのあと、また、何人かの子どもがついてある。道ができた。自動車も通る。けん君と子どもたちの間に、教師が入るすき間がないくらいのつながりができています。

また、ある時は、乱暴をしたり、大声を出したりすることもありますが、皆が静かにしているのに、さわいでいる。しかしその状態を見て、子どもたちは、自分自身がとる態度を学習しています。

普通児の立場でも書きましたが、普通児を対象にしているだけではむずかしい保育が、これらの子どもを通して保育できるといふことはうれしいことです。

この幼稚園の近くに山があります。低い山ですが、急斜面のため、大層登りにくいところです。そこを登るのにどうしても障害児は遅れがちですが、先に登り切った子どもたちが救援隊で来てくれます。自分一人が登るのにもやっとなのに、一歩登れば二歩

すべる。それでもいっしょうけんめい助けてくれます。自分たちのみが頂上にのぼればいい。いいかえれば、自分たちだけが幸せならいいのではないということが少しでもわかってくれるのではないかと思えます。

◆最後に

以上、それぞれの立場からみた、保育の効果について取り上げてみましたが、これは一方的な見方かもしれません。

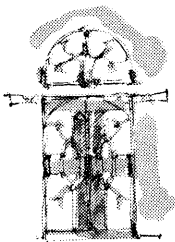
すべての立場から、ブラスの方向にのみ解釈しているように思われるかもしれませんが、普通児のみの保育にしてもこれと同じことがいえるのではないのでしょうか。どんな子どもでも、どんな環境でも、それを最初から拒否してしまえば前進はありませんし、教育とはいえないのではないのでしょうか。今、現在、目の前にした子どもを、いかに教育していかうか、それがどんな子どもであろうと、そこに教育としての楽しみがあるのではないのでしょうか。

今でも、私たちが新しく障害児を受けもつ時は、どのようにも、この子どもをクラスの中に適応させていくか、悩みますし、不安も抱きますが、実際に子どもと何日か付合うことで普通児との接点が見いだされてきます。これは、非常にむずかしいことのようにですが、幼児教育にたずさわる先生方なら、意外にやさしく、楽しさを感じられるでしょう。そのこまかい心くばり、誠意が子どもたちに真の幸せを、与えてあげることになるでしょう。幼稚園

だけではありません。学校教育においても、もっと深い理解がほしいと思っています。すみ子ちゃんは、四月から近くの小学校へ通っていました。しかし何日かすると学校へ行きたがらなくなってしまうそうです。母親がわけを聞くと「センセイ、ピンするからいやだ」というのだそうです。その後、五月から一年近く幼稚園へ通ってきたのですが、日増しに落つきを取り戻し、明るい子どもになってきました。

このように、学校からも拒否される子どもが大勢いますが、集団に入れないからとか、落ちつきがないから、乱暴だからと、教育をきれいごとですまそうとするならば、障害児はもとより、普通児の教育の上にも決して良い結果はあらわれれないと思います。

(鎌倉聖路加幼稚園)



幼児教育講習会

日本幼稚園協会主催

お茶の水女子大学附属幼稚園内
(東京都文京区大塚二丁目一)
地下鉄茗荷谷、バス大塚二丁目下車)

本講習会を例年のように開催いたします。本年も昨年と同様に、第二部(午後の部)は、お茶の水女子大学体育館で実習を主として行ないます。例年のような混雑を避けるために、第二部については会員を前半の二日間(Aの部)、後半の二日間(Bの部)に分けて、それぞれ人数を制限することいたしました。ご了承の上ご参加ください。

第一部 午前の部(九・三〇—二・〇〇)講演

会期 昭和四十六年七月二十二日(木) — 七月二十五日

(日)

会場 お茶の水女子大学講堂

内容 講師交渉中(次号に掲載の予定)

第二部 午後の部(一・〇〇—四・〇〇)音楽リズム

実技

会期 Aの部 七月二十二日(木) 二十三日(金)の

二日間 定員八〇〇名

Bの部 七月二十四日(土) 二十五日(日)の

二日間 定員八〇〇名

会場 お茶の水女子大学体育館

内容 たのしい幼児の遊び

お茶の水女子大学・附属幼稚園関係教官

会費 第一部 八〇〇円

第二部(Aの部、Bの部いずれか) 八〇〇円(テ

キスト代を含む)

なおAの部とBの部は同一内容です。

会費は当日会員証(復のはがき)をそえてお払い込み下さい。

申込期限

六月十五日付の消印分より受付開始(それ以前のお申し込みはおことわりします)但し各部とも定員になり次第締め切らせていただきます。

申込方法

宛名:お茶の水女子大学附属幼稚園講習会係り
東京都文京区大塚二―一―一 下(一一二)

方法:ひとりにつき往復はがき二枚を次の様式にしたがって記入し、復信の表に返信先の園名・園所在地・郵便番号・個人名を必ず書いて申し込んで下さい。

・第一部に参加希望の方は(4)にその旨お書き下さい。

(往信の裏面)

(1)	氏名	希望	希望
(2)	勤務園名	希望	希望
(3)	所在地番号	希望	希望
(4)	同所便加第1部	希望	希望
	参加第2部	希望	希望
	郵便第A部	希望	希望
	参加第B部	希望	希望
(注)	はがきをたてにして		
	で		

・第二部参加希望の方は、(4)にAの部、Bの部、いずれを第一希望第二希望とするかを明記して下さい。

・第二部について

ては、申し込みが定員に達した場合は申し込み順に会員を決定して締め切ります。また人員の都合で、第二希望におまわしすることがあります。

・復のはがきの裏面にこちらで会員証を印刷しておとけます。定員に達した以後の方にはその旨ご通知いたします。従って、復のはがきの裏面には何もお書きにならないで下さい。

・第一部・第二部とも、当日の申し込みはお受けいたしませんのでご了承下さい。

(注意)

・第二部受講の方は、運動に適した服装・靴をご用意下さい。

・電話での申し込みはおことわりいたします。

宿泊 ご希望の方は七月十五日までに下記へ直接申し込んで下さい。

(二食付一泊一・八〇〇円程度)

つる家ホテル 東京都新宿区下宮比町一三

(国電飲田橋東口)

電話 東京(二六〇)三三三六

二三三九

保育者養成の一試案

保育者養成はここ十数年来、養成機関およびその関係者によって繰り返し論じられ、研究、検討されてきた問題である。たとえば、養成機関における教育課程の組織、編成の問題、教授内容の問題、学生指導の問題、運営の問題、実習の問題など、列挙すればいとまがない。

それらの問題の一つをとりあげてみて、一連の相互密接な関連問題が付随してくるもので、本質的には、よりよき保育者の育成に帰結する同質的問題の提起のように思われる。保育科学生の資質向上の問題をとりあげてもわかるように、教員免許状取得および学科修得単位、修学期間の問題をはじめとして、前述の諸分野にわたる問題に拡大する。

私も養成機関に与えられている課題としては、広範囲にわたる保育者の資質が要求されていることと、保育の学科は種々の学

武井幸子



科と直接の関連をもち（一般教育科目、基礎教育科目、専門科目の連携）しかもこれらの要求を二年の短期間に一応解決しなければならぬことであった。

二年間という短い時間的制約の中で、のぞましい保育者となるために、学生に要求される習得、研修すべき学問技術の量は非常な努力と時間を要し、相当の覚悟と心がまえがなくてはならない。これは幼児教育の重要性とあいまって、保育者の高度な資質水準が要求されることはむしろ当然なことといわねばならない。保育科の学生として入学したものは、保育者になるならぬにかかわらず、繁忙きわめる学生生活にも、自らを顧慮させていく意志と体力と、情操豊かな人間性を育成しなくてはならない。

保育者養成機関に課せられた責任は、重かつ大であることは論をまつまでもない。ここに保育者養成にたずさわるものの生きが

いもあるのであって、大局的な問題にとりくみながらも身近に提起するこまかな現実問題にぶつかり、その一つ一つを解決してゆかねばならないのである。

全国的に保育者養成の任にあたる四年制、二年制の大学および各種学校の数とその分布は広範囲におよぶが、各々の学校が当面する実情や問題点にはかなりの格差がある。現に私の経験する実情においても、種々の理由から当然設置されるはずの付属幼稚園の設立がまだ実現に至らない状態である。このことは保育者養成上、教育課程の編成や教授内容、教育実習、学生指導の諸問題に大きな影響を与えている。しかし、与えられた教育環境や条件のよしあしにかかわらず、保育者養成に直接たずさわるものに乗せられた責任の軽減がゆるされるはずはなく、そこに学生指導上の悩みも苦しみもあり、また創意や工夫も生まれてくるものと思ふ。

さて、求められるままに保育者養成のささやかな一試案をここに紹介し、ご批判をおおぐ機会が与えられたことは感謝にたえない。

ここへのべる一例は、保育者養成を目的とする新設短期大学創立当初における学生指導の一試案である。当大学は東京都町田市の人里はなれた山中に、山林山野をきりひらいて建設された小規模な学校である。一日午前三回、午後三回計六回運行するスクー

ルバスが唯一の交通機関である。徒歩では駅から学校まで、一時間ないし一時間以上を要する不便な地理的条件におかれている。

休講あるいは講義と講義の間の空白時間も、市街に出るには十分ではなく、学生は完全に外界から遮断されたかたちとなる。新設大学のため、新入学生にはもちろん上級生はない。高等学校生活から大学生生活への移行に、新しい環境にもなれず多少のとまどいの様子もみられた。

施設、設備（ピアノ、図書館、学生厚生施設）も、世間一般の新設校の例にもれず不備であった。校友関係も密でない状態のもとは、活発な学生生活の諸活動がみられるわけがない。講義においても、各教科から要求される必読の本の山に悲鳴をあげるということもない。高校生活よりやや緩慢になった大学の時間割に、むしろ安易な大学生活に陥るおそれも感じられた。もちろんオリエンテーションの際、講義一週一時間に対し二時間、演習一週二時間に対し一時間の、予習、復習時間を含むことは全学生に説明した。しかし学生はどのようにこの説明を了解し、自発的学習の実をあげているかは私どものうかがい知るところではない。

ただ、保育科学生が資質向上のためなすこと多くして、その限定された時間の短いことを思えば、より積極的な指導の働きかけがここに必要と思えた。何かにつけて不便を感じる地理的条件におかれた学校環境は、他面都心では得がたい新鮮な空気と大自然

に囲まれた利点をもっている。この点を学生指導の上に有効に導入してこそ、与えられた環境を十分に生かし、生活条件の欠陥も満たされてあまりあるものになるのではないかと思った。

大自然に接し、その中での人間教育、情操の陶冶こそ、幼児教育に不可欠な要因であり、最良の教育的環境であるといわねばならない。そこで、学生全員に草花の栽培を経験させることは有効な試みではないかと思ひ、これを「保育総論」の一部の時間および休講、自由時間を使用し、実行に移した。

土づくり、花づくり、芝生づくり

大自然に恵まれている環境とはいえ、大学用地一帯の土壤は固い赤色粘土地である。花壇に設定した場所も、前年度庭園造成に芝が移植されたが、大地に根をおろすことができ枯れてしまっていた。このような状態で草花栽培の計画はまず「土」づくりから始めなければならなかった。幸いに近くの山林には腐葉土があり、これを他の肥料と併用することができた。

約六十名という学生数と、女性の労働力と時間を考慮し、前述の芝の枯れていた前庭約三十数坪をその作業用地と設定した。

準備 (一)

1. 種子、球根の選択、購入

草花の種子、球根は幼稚園庭にふさわしい種類、色彩、季節を考慮した。

また「おじぎ草」のように科学的現象(反応)を即時に示すものも選択した。

その種類は次のようなものである。

○二年草

朝がお、アスター、葉鶏頭、鶏頭、ひまわり、おしろい花、コスモス、千日紅、サルビア、ルピナス、マリゴールド、おじぎ草

○牧草

芝生づくりはしろうとは困難とされているので、栽培容易な牧草の種子を箱で購入、これを芝の種子の代用とした。

○球根

グラジオラス、カンナ

種子の購入は市販の袋入りのものよりは「はかり売り」のものが安価につく。しかし「はかり売り」はこの種のもの屋にもあるわけではない。私の場合実情を知らなかったこと、地方から赴任してすぐのことで、土地の不案内とでかなりの時間と労力を費した。その結果有名種苗会社か、大きな園芸店、栽培業者にあらかじめ問合せ交渉するのがよいということがわかった。

2. 園芸道具の種類と購入

経費の関係上道具の購入は最少限度にとどめ、かなり離れたところにある付属高等学校から借用することにした。

その種類は次のようなものである。

- ・移植ゴテ（柄との継目の丈夫なものを選択する）
- ・シャベル
- ・くわ
- ・レーキ（床ならし用）
- ・じょうろ（穴の細かいものを選択する）

3. 肥料の選択と購入

肥料は農業協同組合で購入すると格安である。その種類は次のようなものである。

- ・油粕
 - ・過燐酸石灰
 - ・苦土石灰（酸性の土壌を中和させる）
 - ・腐葉土および堆肥
- ## 4. 草花種子の屋内展示

学生が扱う種子の発芽状態を観察しやすい、日当りのよい場所を選定する。透明プラスチック容器（通称バック。くだもの屋で苺その他の果実を入れて販売）各々に水を含ませた脱脂綿をしき、その上に花の種子をまいて発芽状態を観察させる。

準備 (一)

学生には次のようなものを準備させる。

1. 服装 労働用スラックス、くつ、軍手、手ぬぐい、日よけ帽子（あるいは手ぬぐいで代用）
2. 苗床用容器

廃物利用の空缶、木箱、透明プラスチック容器（通称バック）等を二〜三個各自用意。透明プラスチック容器が一番望ましい。透明なので内部の土の状態（底にゴロ土をおきその上に細かい土をのせる）が点検できる。

3. ラベル（A） 草花および学生の記名用のもの各一枚ずつ。

風雨にさらされても消えない記名のしかたを学生各自に創意工夫させる。

ラベル（B） 花壇用のものでグループの学生の記名用木製立札、図工の教科で製作。

実施 (一) 苗床づくり

1. 事前教育

園芸に精通する自然科学概論のW先生の協力をえて、あらかじめ草花栽培に関する講義をきく。その内容は土壌、肥料、種子のまき方、育て方、移植のしかたその他いろいろの注意。

2. グループ編成

四く五名を一グループに編成する。この際、学生相互の人間関係を拡大するため特定の交友関係を考慮しなかった。

3. 種子の配給と栽培開始

前述の種子を各グループに配給する。学生は受講した知識やデモンストラーションをもとに種まきを開始する。使用の土は校庭の造園用黒土を利用、以後草花の観察養育をつづける。

後日、草花の苗が移植する段階に至り、花壇に定植する。球根は秋の開花を計画したので夏になってから植える。

実施 (二) 花壇および芝生づくり

まず前年度移植して枯れた芝を、土と草に分ける。黒土は表土として使用するため他の場所にとり除いておく。草は堆肥として使用。次に硬化した粘土地を掘りおこし、空気と日光にあてかたまりをほぐす。地中の石は除去する。堆肥、油粕、過燐酸石灰、苦土石灰を元肥として施し、とり除いておいた黒土の一部を入れて整地をする。

花壇にする箇所を設定。それ以外の空地に牧草の種子をまき、のこりの黒土をうすくかぶせ、その上を軽くおさえて水を散布する。発芽まで、ゴザ、ムシロ、ビニール等をかけて保護する。

以上大体土づくり、花づくり、芝生づくりを報告した。実施過

程においては多くの教育的意義を経験することができた。それらのいくつかをひろいあげてみると、まずグループ編成がある。保育者の現場の人間関係は多角的である。教師と子ども、教師と父母、教師と教師、教師と経営者というように、複雑多岐である。特定の交友関係をさげ、無作為にグループを編成したのも将来のことを考慮してのことであった。グループの中で新しい人間関係をつくり、作業の過程において親睦と相互理解を深めてほしいと願った。結論的には人間関係のうまくいったグループもあれば、そうでないグループもあった。しかしこれらの人間関係が直ちに植物栽培の上にも反映した。

私は日照りの日も、暴風雨のさ中も、あえて学生の植物に対する扱いをみてまわり、できるだけその記録をとって学生評価対象の一つとした。これらの植物を点検（観察）することによって、学生各自の愛護の度合とグループの協力の度合とを察知することができた。そして、それを今後の学生指導の資料にした。苗の移植の段階に達しさらにこのことは明確に示された。苗床の容器を一堂に集めその発達状態を学生に比較観察させた。保育原理や心理学の理論をまたずとも、植物は如実に生長発達の原理、個体と環境論、養育態度の是非論に及ぶ諸問題を、暗黙のうちに提起してくれた。がっしりした苗に育ったもの、色つやも悪くひよろひよろと弱々しげに育ったもの、うぶ毛のようになって十分育たな

かったもの、また全く発芽がみられなかったものなどがあり、各かなり差が示された。これは植物のおかれた環境や養育態度の欠陥によることが明らかにされ、学生自ら反省の契機が与えられた。

苗床用ラベルについては、創意工夫をさせたが、定規入れ、木片、折箱を利用したものから、ボール紙、用紙をセロテープでおったもの、透明のプラスチック容器を二重にして、その間にのりではったものなどがあつた。また記名材料もインク、墨、マジックインク、クレヨン、エナメル等があり、日光や風雨にさらされても消えない記名の方法がひろうされた。これは現場で幼児の植物栽培の際に参考になると思う。

土に接することに積極的な態度を示さず、地中から這い出す昆虫や小動物に奇声をあげて逃げまわっていた学生たちも、次第に自然に親しむようになった。素手で土をいじり、手にマメができても軍手の必要を感じなくなった。作業開始当時は作業道具の扱いも不得手であつた。土をおこすのに必要な力の使いかたや、身の動きを知らぬ者に身をもって実地的な指導をしなければならなかつた。しかしこれも、自分自身の体重を巧みに使い、大地にシヤベルを突きさすことも会得するようになった。

作業道具の不足と女性の体力を考慮し、作業中はグループを二つに分け、休息と作業を交替させた。小鳥の声に耳にかたむけな

から大地に寝ころんで休むもの、土に腰をおろして楽しみに談話にふける学生たちの群がみられた。よごれることを気にせず土に親しみ、小動物を追って大地を這いまわる学生の姿がみられるようになったのも、一つに作業支度の効果によるものと思われる。

この点には、かなりきびしい点検に留意した。そのために付属高等学校から、卒業生が不用になっておいていった使用可能な運動靴をもらいうけ、作業靴の不備なものに貸与する準備もしておいた。太陽のもとでは必ず帽子あるいは手ぬぐいを使用して直射をさげさせ、現場の園外保育時の子どもの扱いの一つとして注意を促した。

植物栽培開始一ヵ月ごろには、学生の自主的行動がみられ、指示をまたなくても、作業道具の出し入れ、使用後の始末がみごとに行なわれた。敏捷な行動で作業に使用した各自の道具の土をおとし、水で洗って整然と並べて干し、乾いたところに誰がしまつともなく、所定の場所にしまわれていた。これは、学生の生活態度の一面がうかがわれ喜ばしく思った。ただ学生の視覚的行動の変化はともかくとして、それにともなう内面的変化についてはかり得なかつたことは誠に残念であつた。

この試案は、一般教育科目の「自然科学概論」および専門教科「園工」との横の連携と協力によって実現をみたことを特記せねばならない。幸いに「自然科学概論」の担当者が園芸の實際にく

わしく、直接間接に指導をうけることができた。また「図工」担当者には木製ラベルの製作の協力を得た。

従来の保育科教育課程のありかたとして、一般教育科目を充実させて人間教育をはかる立場と、専門教育科目を重視して職業または職能教育に重点をおく立場とが対立的であった。望ましい保育者育成の観点から、保育科教育課程のあり方や内容を考えてみると、この両者が必須条件として要求される。すなわち情操豊かな教養人であると同時に職業人でもあらねばならぬのである。

保育科の教育課程は他学科とはちがいとくに教職専門科目の科目が多く、一般教育科目、教科専門科目との三本の柱から構成されることをその特色とする。これら教科の均衡と横の連携をはかるには、かなり緊密な教科間の連携と協力を保ち、保育科学生に役立つものを教授内容にもりこむことを相互に打合わせることが一つの対策であろう。

自然を愛する心は植物栽培によって誘発され、さらに育てられる。植物は人の愛情を裏切ることなく養育者の「育ての心」に応じていかようにも変化する。それは成長もすれば遅滞もする、あるいは枯死することもある。真の愛情のこもった扱いは植物の成長を促し、美しい開花の次元にまで導き、立派な種子を生産させる。幼稚園教育要領の「自然」の領域には

①身近な動植物を愛護し、自然に親しむ。

②身近な自然の事象などに興味や関心をもち自分で考えたり扱ったりしようとする。

と述べてある。動植物を愛護する精神を養うことは、とりもなおさず情操豊かな人間性の育成にその主眼をおくのである。豊かな情操の基盤の形成期にある幼児に、動植物の愛護と自然に親しませる機会を与えることが、いかに重要なことであるかを理解することができる。ここにおいて、幼児教育にたずさわるものの情操教育と望ましいパーソナリティの形成が「幼児教育」に先行して強調される。

物質文明と社会構造の複雑化に伴い、人間性の喪失がその現象としてみられるようになった。保育者においてもその例をまねがれるものではない。これは教育のありかたにその責任の一端があるのではなからうか。ともすると単位や資格取得にうき身をやつす学生と学校当局のあり方が、教育の何であるかを忘れ、人間性を無視した教育の価値観に支配されているように思われる。保育者の養成にあたり、質的人間教育の重要性を特に強調することでは、教育の原点にかえり、保育の意義をあらためて考えることはなからうか。

(鶴川女子短期大学保育科)

遊び場のあり方

塩川 寿平

今まで三回にわたって、遊び場の現状、遊び場の本質的価値について検討してきた。今回は、遊び場を現実にある物にするための、具体的な検討を加えていきたいと思う。

保育所の乳幼児を対象に、どのような保育が考えられ、そのための環境条件としてどれだけの遊び場が用意されるべきか、結論を出してみたいと思う。

一、遊び場における保育時間

遊び場において行なわれる保育にはどのようなものがあるのだろうか。それは全体の保育計画に対して、どのような割合にあるのだろうか。ここでは著者、および茂呂塾保育園（東京板橋区）の大沼和子園長、および野中保育園（静岡県富士宮市）の塩川豊子園長の三氏の臨床経験から、遊び場（屋外保育施設）における

保育時間の割合を出してみた。

注1 一日の保育時間について、労働省婦人少年局「既婚女子労働者に関する調査」（一九六六年六月、八三ページ）によると、

八時間未満三五・六%

八〜九時間未満三八・八%

九〜十時間未満二一・七%

十時間以上及び不明一一・九%

となっているが、ここでは原則として一日八時間と考えて検討する。

注2 提示された時間は、著者七年、大沼十五年、塩川十八年の臨床経験をもとにした仮説であって、絶対的時間を意味しない。あくまでも一年間を通しての平均であり、地域・季節・園の

(第1表) 8時間保育を考えた場合の各保育時間の割合

年齢 保育時間 提示者	5、主に11カ 月児を3見る末満			1歳3ヵ月～2歳			3～4歳			5～6歳			備考
	著者	大沼	塩川	著者	大沼	塩川	著者	大沼	塩川	著者	大沼	塩川	
a	2:30	2	2	2:30	2:30	2	2	2	1:40	2	2	1:20	屋内保育
b	4	4	3	2	2	2:30	2	2	2:20	1:30	1:30	2	
c	0:30	1	1	1:30	1:30	1:30	1:30	1:30	1:30	2	2	2	
d	1	1	2	2	2	2	2:30	2:30	2:30	2:30	2:30	2:40	屋外保育

行事等によって変わる。

たとえば、運動会の前には屋外保育がふえるであろうし、発表会の前には屋内保育がふえるであろう。また雪国等、地域においては自然の影響を大きくうける。それゆえ、解釈にあたって、地域・季節・行事等の変数を加えて解釈してほしい。

注3 臨床経験にもとづく仮説であるが、十数名の保育関係者に提示したところ、ほぼ肯定された。一年間を通した保育平均値として、信頼度は高いといえる。

注4 保育時間八時間について以下のように分ける。記号a、b、c、

(第2表) 遊び場における保育時間d

年齢	d (8時間保育のうち)
1歳3ヵ月末満	1時間～2時間
1歳3ヵ月～2歳	2時間
3～4歳	2時間30分
5～6歳	2時間30分～2時間40分

dとする。

a 給食の時間(おやつ、昼食)

b 午睡

c 屋内保育の時間(自由保育の $\frac{1}{2}$ を含む)

d 遊び場にいる時間(自由保育の $\frac{1}{2}$ を含む)

以上三氏の提示したdを年齢別にまとめると第2表のとおりである。

二、遊び場における保育内容

今、明らかにされた「遊び場における保育時間」には、どのような保育内容が予定され、実施されているのであろうか。

今、左の資料を参考としながら、その全ぼうを明らかにする。

厚生省児童家庭局「保育所保育指針」、全社協保母会保育要領作成委員会「保育所保育要領」、北九州市保育所連盟保育研究協議会「北九州市保育実践計画書」、野中保育園「年間保育計画」以上を年齢別に検討する。

年齢 一歳二カ月未満児について d：一〜二時間

生活・遊び

- ①日光浴、空気浴
 - ②ウサギ、ハト、池の金魚等小動物めぐり
 - ③遊び場の花壇へ花を見に行く
 - ④早い子はよちよち歩き ⑤小プールで水遊び
- 以上すべて保母と共に行なう。

年齢 一歳三カ月〜二歳児について d：二時間

体育・健康

- ①ひとり歩き ②遊具遊び（船形シート、スベリ台）
- ③ボールをコロコロところがして追う ④タルころがし
- ⑤リズム体操（手首、足首、頭の運動、全身運動）
- ⑥マット遊びと低いとび箱遊び ⑦散歩
- ⑧砂場遊び ⑨小プールで水遊び
- ⑩かけ足（初歩的な） ⑪炎天には帽子をかぶって出る

社会・言語

- ①呼び合う
- ②遊び場所名を覚える。（例）ハトさんというハト小屋の所へ行く

③あいさつする ④困った時助けを求める

⑤行動の模倣を始める。年上の子について歩く

⑥自他の区別をはっきりいう

⑦名を呼ばれて応じる。要求に応じる

⑧初期のままごと ⑨かくれんぼ（簡単なもの）

造形

①砂場遊び ②地面をつつく

③ブロック遊び（戸外用の大型のもの） ④板ならべ

自然

①カエルをつかまえようとする

②犬を見て（笑う、泣く）表情が出る

③花を見つけてつむ

④ウサギ、カメ、ハトにえさをやる

年齢 三〜四歳児について d：二時間三十分

体育・健康

①歩行（普通に歩く、連歩、小走り、方向転換、合図で停止）

②体操（関節の屈伸、全身運動）

③遊具遊び（このころになると未熟だが何でもできる。ブラン

コ、スベリ台、鉄棒、ターザン等）

④大きなリング箱を運ぶ

⑤ ボール投げ（大きいボールの両手投げ、小さいボールの片手投げ）

⑥ 両足とび ⑦ 片足とび ⑧ つまき歩き

⑨ 三輪車を引っぱる ⑩ 平均台を少し歩く（低いもの）

⑪ 両足交互に階段のぼり ⑫ 屈伸体操

⑬ 手を洗って教室に入る

⑭ プール遊び（三十センチの水深で手をつけて泳ぐ）

⑮ 炎天に出る時帽子をかぶる規則が身につく

⑯ 裸でマラソンをする

⑰ リレーで（バトンが渡せる）遊ぶ

⑱ 低い木に登る ⑲ 雪だるまを作る

社会・言語

① 二人で遊ぶ。声をかけ合う

② 三、四人いっしょにいて、一人遊びや互いに関連をもちながら遊ぶ

③ 応待、喧嘩、親愛をする（自他の区別ある活動）

④ 危険な状態にある子を保母に教える

⑤ 共同で遊具を使う（順番のとりっこもする）

⑥ 二十人ぐらいいでもまとまって遊ぶことができるようになる

⑦ 保母や友だちと遊びの相談をする

⑧ ばく、きみを使う

⑨ 行事を喜ぶ（子どもの日、七夕、お祭り、クリスマス、お正月等）
⑩ 遊んだあとかたづけをする

⑪ 約束、きまりを守る

⑫ 物語を作って、話し合いながらごっこ遊びをする

総合的遊び

① 追っかけっこ ② リズム遊び

③ ままごと ④ ブロック遊び ⑤ 徒歩競走

⑥ 乗り物ごっこをする ⑦ どんご遊びをする

自然

① アサガオを保母と植える ② 植物の葉をひろう

③ 動物を見て名をいう ④ 動物ごっこをする

⑤ 身辺の自然現象に驚く（にわか雨、雷、雪等）

⑥ 小動物を追う。つかまえる（カニ、バッタ、カエル、トンボ等）

⑦ 花をつんで遊ぶ

⑧ 身のまわりの数や色のちがいに注意する

⑨ きれいな石や釘をひろう

⑩ 動物の飼育、植物の栽培を保母とする

⑪ 年長児の田植を見る ⑫ ジュズとりをして遊ぶ

造形

① 砂場でおだんごを作る

② 土で作ると砂よりも上手にできることをみつける

- ③ リンゴ箱やダンボールで乗り物や怪獣を作る
- ④ 形おし遊びをする
- ⑤ コンクリートに白墨で絵をかく
- ⑥ 一斗カンにペンキで色をぬる
- ⑦ こいのぼりを作って、走って泳がす

音楽

- ① 屋外でハーモニカをふく
- ② 太鼓をたたく
- ③ 笛、ラッパをふく
- ④ シンバルをならす
- ⑤ 遊びながら歌をうたう
- ⑥ マーチに合わせて歩く(四分の二、四分の四拍子)
- ⑦ リズムに合わせて動作する
- ⑧ スキップの初歩

年齢 五〜六歳児について

d:二時間三十分〜二時間四十分

体育・健康

- ① 園の体育設備を使って遊ぶ
- ② 強弱、速度を聞き分けてそれに応じて歩く
- ③ いろいろなスキップ遊びをする
- ④ かけっこ、とびっこ、並びっこ等が敏速にできる
- ⑤ 遠い所(五〜八キロメートル)までがんばって歩く
- ⑥ 集団遊びのルールを守って遊ぶ
- ⑦ ボールを投げたり、まどに当てたりする
- ⑧ 設備を工夫して遊びを發展させる
- ⑨ 疾走、リレーをする
- ⑩ 幅とび、ナワとびをする
- ⑪ 水遊びから、水泳にうつり、もぐりも上達する
- ⑫ プールへ頭からとび込める
- ⑬ 八メートル呼吸せずバタ足で泳げるようになる
- ⑭ とび箱やマットを使って活発に遊ぶ
- ⑮ マットの上で三点倒立ができる
- ⑯ フォークダンスを楽しめる
- ⑰ 二メートルの高さからとび下りることがができる
- ⑱ 高い木に登る
- ⑲ ボール五メートルに登る
- ⑳ ルールにしたがって競技する
- ㉑ 玉入れ、だるま運び、綱引き等の団体競技をする
- ㉒ 汽車ごっこでまとまって走ることができる
- ㉓ 団体行進をする
- ㉔ おしくらまんじゅう、ハンカチおとし、目かくし鬼等をする
- ㉕ 持久力遊びをする(鉄棒にぶらさがる)
- ㉖ すもうをする
- ㉗ まりつき競争をする
- ㉘ 雪合戦をする。雪だるまを作る
- ㉙ 保母のナレーションや音楽に合わせて身体表現をする
- ㉚ 遊びから教室に入る時手を洗う

- ③① 汗をかいたら裸になつてふく
- ③② 炎天で遊ぶ時には帽子をかぶる
- ③③ からだの異常を早く保母に知らせる
- ③④ 運動後の休息が進んでできる
- ③⑤ 必要に応じて衣服の調節をする

社会・言語

- ① 園生活のきまりを守つて遊ぶ
- ② 共同の遊具や用具を大切にゆすりあつて使う
- ③ 集団行動を早くきちんとする
- ④ 自分の意志をはっきりいう
- ⑤ 人の立場を考ふるようになる
- ⑥ 友だちと協力してごっこ遊びをする
- ⑦ 話し合いをまとめようとする
- ⑧ 遊び場で保母の必要な連絡がしっかり伝わる
- ⑨ 順番を守ること、道具の使い方について話す
- ⑩ お客様ごっこ、店やごっこで言葉の使い方が正しくできる
- ⑪ 遊びの中で文字や数字に関心をもつ
- ⑫ 自分の遊びを他人に話して聞かせることができる
- ⑬ 行事に参加することを喜ぶ(子どもの日、母の日、七夕、敬老の日、遠足、七五三、クリスマス、正月、ひなまつり等)

自然

- ① 身近な動植物をかわいがり、進んで世話をする
- ② 事物の相違点、変化、成長するものに気づく

- ③ 性質や変化に疑問をもつ

- ④ 気象の変化に興味をもつ(梅雨、月、星、夕立、虹等)

- ⑤ 高低、左右、遠近、広い狭い、長短などがわかり、くらべて遊ぶ(木の実や木の葉で遊ぶ)

- ⑥ 遊び場の変化で気候の変化を知る

- ⑦ 冬の自然現象の美しさに気づき、驚く(霜柱、雪、氷等)

- ⑧ 冬の動植物の変化に関心をもつ(温度と生物の関係、冬ごもりする小動物、水栽培の植物等)

- ⑨ 冬ごもりする小動物、水栽培の植物等)

総合的遊び

- ① どんご遊び
- ② サンタをさがしにお山へ行こう

- ③ 宝さがし

造形

- ① 遊びにつかうものを工夫して作る(チャンバラの剣等)

- ② 土を掘って穴をあけ、柱を立てる

- ③ インディアンごっこ等の遊びで町や部落を建設する

- ④ 外で絵を描く

- ⑤ 外でフィンガーペインティングをする

- ⑥ リンゴ箱に板や角材を釘で打ちつける(自動車や動物を作る等)

⑦こいのぼりを作って木やポールに上げる

音楽

①拍子の動作をマスターする

②運動会で応援合戦をする

③鼓笛隊をやる ④歌いながら遊ぶ

以上、保育内容について具体例を上げ、遊び場でどのような保育を予定しているのか、その全ぼうをとらえようと試みた。どれだけの時間に、どれだけの保育を行なうか、保育計画作成上の留意点であるが、この両者の関連は、また遊び場のあり方を決定する重要な要因である。

三、遊び場の分析

子どもたちが戸外にいる時間と、戸外の生活の内容を見てきたわけであるが、次に具体的な活動を保障する施設、設備について体系的に分析してみたいと思う。

1. 場所（スペース）別大系

第一に、諸施設の配置場所（スペース）別に系統化する。

① かけっこ、リズムダンス、ボール投げ等を行なうスペース

「平地（グラウンド）施設」

② ブランコ、砂場、子どもの小屋等を配置するスペース「遊

具施設」

③ ウサギを飼ったり、花を植えるスペース「自然環境施設」

④ 道具かたづけの場所、水のみ場、足洗い場等の「付属施設」のスペース

以上の四つの大系に分けられる。

2. 機能別中系

以上四つに分けられた大系についてさらに機能別に分化する。

①平地（グラウンド）施設について

陸上競技系、遊技系、球技系、移動遊具系の四系

②遊具施設について

固定遊具系（運動機能を主とした固定遊具）、固定遊具系（機能、模倣受容、構成を主とした固定遊具）、素材遊具の三系

③自然環境施設について

小動物（飼育）系、植物（栽培）系の二系

④付属施設について

付属施設系

以上、機能別中系である。

3. 機能別中系にしたがって、さらに「設備別及び遊び（屋外保育）の具体例別小系」に分析する。

系

屋 外 保 育 具 体 例 別

25メートル疾走，マラソン，リレー，障害物競争，ナワとび，幅とび，高とび
マット演技，ラジオ体操等

リズムダンス，鼓笛隊，電車，交通信号，かげふみ，忍者ごっこ，まりつき，ウサギと
び，前とび後ろとび，うずまき，かごめかごめ，ハンカチ落とし，おにごっこ，めん
こ，陣とり等

ボール投げ，ボールけり，野球，ドッチボール，サッカー，玉入れ，キャッチボール，
ノック，まとあて，ハンドボール，羽つき，バドミントン，ゴルフ等

二輪車，三輪車，リヤカー，スケーター，ホッピング，タイヤころがし，タルころが
し，輪まわし，竹うま，ゴーカート等

のぼる，ふる，すべる，上下する，ぶらさがる，くぐる，渡る，まわる等

ままごとごっこ，自動車ごっこ，すもう，おしくらまんじゅう，馬のり等

砂遊び，どろんこ遊び，カラクタによる造形遊び，プール遊び等

虫，鳥，魚，小動物一般の飼育・観察を行なう等

草，花，木，野菜等の栽培・観察を行なう等

水を飲む，足を洗う，大小便をする，休憩する，スコップやマットやとび箱をしまう等

(第3表) 遊び場分析表

施設別	系	大系	中系	小
	場所別 (スペース)	機能別		設備別
遊び場 (屋外 保育 施設)	①平地 (グラウンド)施設	1. 陸上競技系	グ ラ ン ド	
		2. 遊技系		
		3. 球技系		
		4. 移動遊具系		
	②遊具 施設	1. 固定遊具(I)系 (狭義の遊具; 運動機能を主) (とした固定遊具)	木, ジャングルジム, ブランコ, スベリ台, シーソー, 鉄棒, ト ンネル, メリーゴーランド, 渡 り等	
		2. 固定遊具(II)系 (広義の遊具; 模倣・受容構 成遊びを主とした固定遊具)	子どもの家, ボンコツ車, 芝生, 土の小山, 草のしげみ, テーブ ル, 木かげ等	
		3. 素材遊具系 (最広義の遊具; 素材の利用 による遊具)	砂場 土場(どろんこコーナー) 水場(プール・シャワー) ガラクタ場等	
	③自然環境 施設	1. 小動物(飼育)系	自然の草むら, 木立, 小川, 池, 犬小屋, ハト小屋等	
		2. 植物(栽培)系	花壇, 小さな畑, 植木場自然の 草むら等	
	④付属 施設	1. 付属施設系	飲料水用設備, 生がき(へい) 足洗い用設備 外便所 ベンチ 倉庫 小屋等	

以上1、2、3をまとめ、表にすると、第3表のとおりである。

次に**固定遊具(I系)**(狭義の遊具・運動機能を主とした固定遊具)について設備上段と具体例下段を対照して考察する。

設備

屋外保育具体例

自然

- 1. 木
- 4. 坂

- 2. はしご
- 5. 小山

- 3. なわ
- 6. 大岩等

人工的

- 1. ジャンゲルジム

- 2. 太鼓梯子

- 3. 攀登棒

- 4. コンクリートの山

自然

- 1. 木の枝

- 2. ターザンの綱

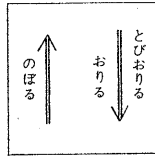
人工的

- 1. プランコ

- 2. 椅子プランコ

- 3. 遊動円木

①のぼる(登攀) 運動を主としたもの



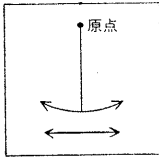
運動方向図

○懸垂力・協応性・柔軟性・器用性・

平衡感覚・身体の支配力等

○成功・冒険・征服感をかなえる

②ふる(横振幅) 運動を主としたもの



○手足の協応性・リズム感・身体の支

配力・平衡性・柔軟性等

○飛しようの夢・快感をかなえる

- 4. 遊動船

- 5. スカイスクーター

自然

- 1 斜面

人工的

- 1. スベリ台

- 2. 螺旋スベリ台

- 3. コンクリートの山

- 4. スカルプチュア

自然

- 1. 角材と石の組み合わせ

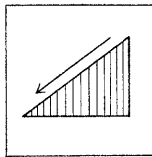
人工的

- 1. シーソー

- 2. 船型シーソー

- 3. テーターラダー等

③すべる(滑走) 運動を主としたもの

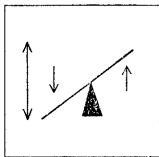


○高低感・速度感・平衡性・敏捷性・

協応性・筋力等

○乗り物遊び、受身的状態

④上下(縦振幅) 運動を主とするもの



○平衡感・リズム感・身体の支配力・

協応性

○ギタタンパコンの快感

自然

1. 木の枝

人工的

1. 鉄棒

2. 雲梯

3. つり輪

自然

1. ほら穴

2. 古だる

3. 土管

人工的

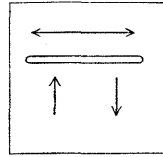
1. トンネル

2. 汽車

自然

1. (おとなが子どもを抱いて回すなど)

⑤懸垂運動を主としたもの

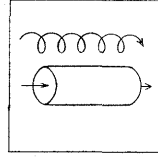


○懸垂力・平衡感覚・柔軟性・筋力・巧緻性

○自己認識の喜び

巧緻性

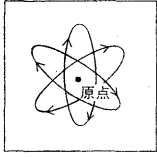
⑥くぐる(入坑)運動を主としたもの



○協応性・柔軟性

○遮断・別世界の楽しさを味わう

⑦まわる(回転)運動を主とするもの



人工的

1. メリーゴーランド

2. 波動回転塔

3. ストライド等

自然

1. 石

2. 岩

人工的

1. 渡り

2. 乱ぐい

3. ブロック等

1. 三角スベリ台

2. リフト

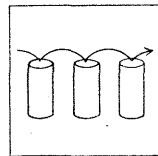
3. アームストロング(以上複合機能遊具)

4. スカルプチュア(彫刻遊具)

○身体の支配力・平衡感・敏捷性・器用性・リズム感

○走馬の喜び

⑧わたる(歩行)運動を主としたもの



○身体の支配力・リズム感・平衡感・敏捷性・器用性

○成功の喜び

⑨複合機能運動によるもの

(先に述べた①～⑧までの運動を複合してもっている)

特記 固定遊具(I系)についての意見

1. 子どもたちは喜んで遊んでいるか。すなわち心理的に満たされているか

2. 遊び方において、子どもたちの創造力、空想力が生かされているか

3. 運動的にみて、能動的な遊具か。子どもが受身になる遊具は望ましくない。自己の努力が進歩となって現われる遊具であること

4. 基本機能が生かされているか

5. デザイン、色は子どもたちの立場にたったものか

6. 安全性は考えられているか

7. 遊び場の本質的価値にかなっているか

等について留意すべきである。

固定遊具(II系) (広義の遊具・①模倣、②受容、③構成遊びを主とした固定遊具) について同様に考察する。

設 備 屋外保育具具体例

1. 子どもの家 (ブレイハ ウス)
2. こわれた自動車 (ボン コツ車)
3. 土の小山

- ① ままごと
- ② 忍者ごっこ
- ③ お店やさんごっこ
- ④ 自動車運転
- ⑤ すもう

4. 草のしげみや木のしげ

5. 芝やクローバの群生地

6. テーブルと木かけ (藤 棚など)

7. 小川 (小水路など)

8. 坂道と秘密の小道等

1. 砂場

2. 土場 (土遊び場)

3. 水場 (プール、シ ャワーコンクリ ートのたたき)

4. ガラクタ場 (造 形 の場所、材料 置き場)

① おしくらまんじゅう

② お山の大将おれ一人

③ ひと休み等

④ 感覚的砂遊び

⑤ おだんご作り

⑥ 型ぬき

⑦ トンネル作り

⑧ 城作り

⑨ 自動車遊び

⑩ もぐら遊び

⑪ 穴ほり等

⑫ どんご遊び

⑬ おだんご作り

⑭ トンネル作り

⑮ 穴掘り

⑯ 塔作り等

⑰ 水遊び

⑱ 泳ぐ

⑳ こうらぼし

㉑ もぐる

㉒ 水になれる

㉓ 目を水の中であける

㉔ ロケット遊び

㉕ とびこみ

㉖ 石ひろい

㉗ 綱引き

㉘ 水中歩き

㉙ ジャングル部落作り

㉚ 自動車作り

㉛ 動物園作り

㉜ 怪獣作り

㉝ 釘を木にうつ

㉞ ノコギリで木を切る

㉟ 木に色をぬる

㊱ 材料をえらぶ

㊲ 飛行機を作る等

小動物（飼育）系について

1. 自然の草むら
2. 自然の木立
3. 小川
4. 池
5. 犬小屋
6. ハト小屋等

植物（栽培）系について

1. 花壇
2. 自然の草むら
3. 植木場
4. 小さな畑

①虫

バッタ、スズ虫、セミ、カブト虫、チョウ、ホタル、アリ、カブト虫、コオロギ、イモ虫

②鳥

スズメ、ハト、ツバメ、カナリヤ、ウグイス

③魚

キンギョ、コイ、フナ、ドジョウ

④小動物一般

カエル、イモリ、トカゲ、ウサギ、ヘビ、イヌ、ネコ、ヤギ等

①草

レンゲ、ナグサ、オオバコ、ジユズハグサ

②花

ヒマワリ、ユリ、コスモス、バラ、アサガオ、スミレ、チューリップ、キク

③木

マツ、ミカン、スギ、リンゴ、イチヨウ等

④野菜

ナス、イチゴ、キュウリ、ヘチマ、そら豆

付属施設系について

1. 飲料水用設備

(水飲み場)

①手を洗う

②顔を洗う

③水を飲む

④砂場に水を運ぶ

⑤プールに水を入れる等

①足を洗う

①遊び場に小便をしない

②もらさない

③トイレで大小便をちゃんとする

④下足で出入りできる

①遊びつかれたら休む(休憩)

②長い間炎天にいない

③静かな遊びをする

①スコップ ②マット ③三輪車 ④二輪車

⑤タイヤを整理

⑥玉入れのポール

⑦綱ひきの綱 ⑧とび箱等

①はな紙はごみ箱へすてる

(つづく)

9. ごみ箱

(静岡厚生保育専門学院)

幼児の、時間と空間をどのように理解するかということは、幼児教育にとって重要な課題である。

おとなはすぐに時計や暦の時間を考え、時間は過去から現在、未来へと一樣に進むものと思いやすい。また思いのままに、時間を区切ったり区分したりできると考えやすすい。しかし、人間にとつて時間はそんなに単純なものではない。子どもは夢中になって遊んでいる時には、食事の時間にも気づかない。何かに没頭している時の時間と、いやいや、何かをしている時の時間とは、たとえ時計の上の時間間隔は同じでも、質的に違う時間である。子どもが自分でわかり、発達していくのには、子どものペースで進行する時間を必要とするであろう。

ところが、最近では幼児の生活も一段と忙しくなってきた。幼稚園から帰ってから、外国語教室、体育教室、学習塾などに時間をとられて、遊びの時間が失われつつある。幼稚園の中でも忙がしく、次々に行事があり、一日の中でもカリキュラムを遂行するのに追われる。幼

児にとつて「自然な」時間がこわされていくのではないだろうか。幼児の精神が発達する「時」が与えられていないのではないだろうか。

空間についても同様である。住いについても、土や自然物から遠く離れた高層建築の住居で育ち、幼稚園に来て、走り回ることができず、すわりこんで自分の遊びに没頭する空間をもつことができない。幼児の成長にとって必要な空間はどのようなものであるかをもちと研究せねばならない。幼児の生活にとって、土、太陽、草木や大気のような自然の環境が大切であるが、時間と空間は最も基本的な環境である。

今月号では、神山先生に、物理学の立場から、時間と空間について書いていただいた。おとなの常識的な概念と、最近の学問の考え方は違うことが多いので、これからいろいろの専門の立場から時空の問題について問題提起をしていたら、幼児教育ではどのように考えたらよいかを明らかにしてゆきたい。(津守)

幼児の教育 第七十卷 第七号

七月号 © 定価一〇〇円

昭和四十六年六月二十五日印刷
昭和四十六年七月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 貞
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一

印刷所 凸版印刷株式会社

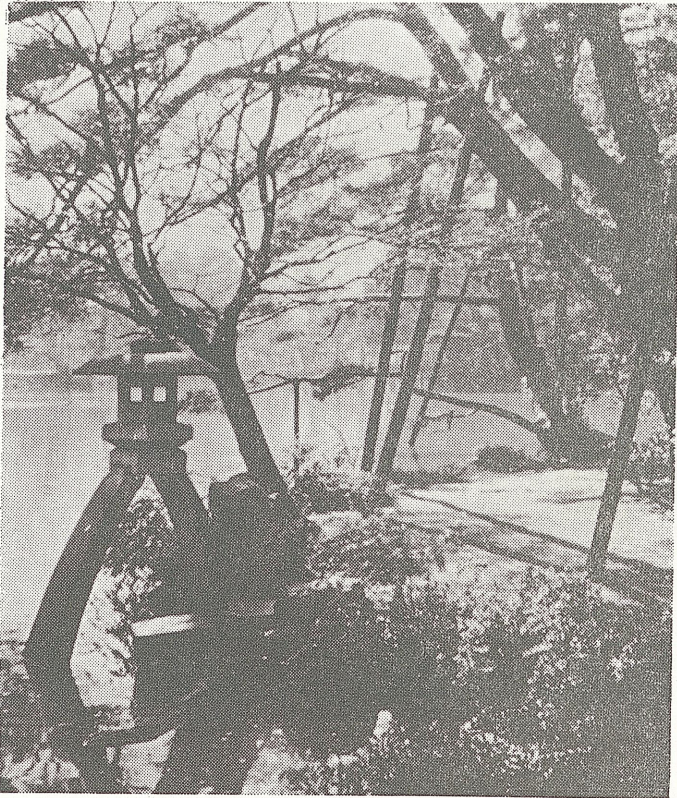
101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所のフレイベル館にお願いたします

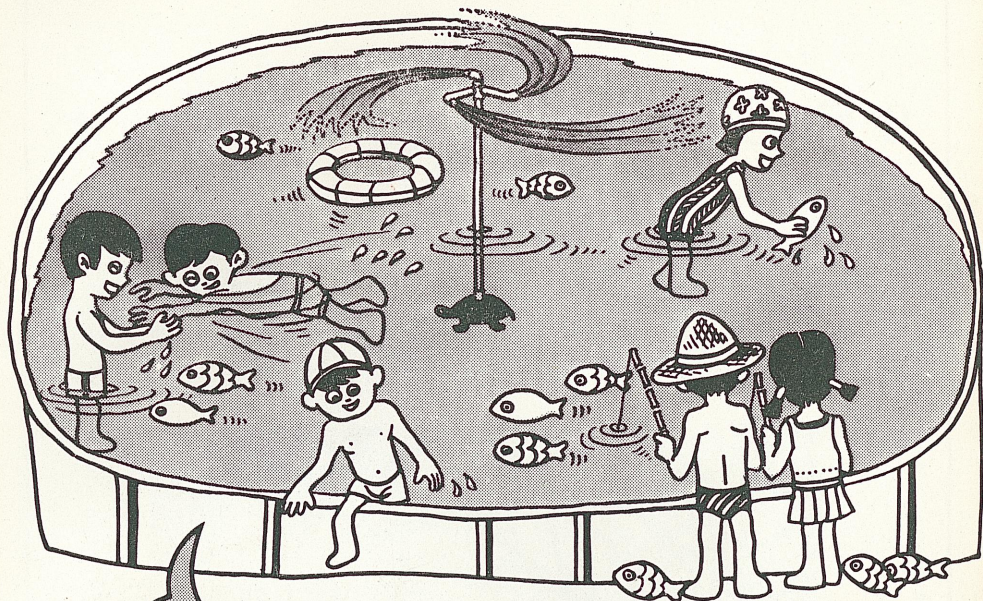
8月の全国大会は 金沢です

会 場 金沢市観光会館ホール
日 時 8月1日(日)・2日(月)・3日(火)
会 費 700円(資料代ほか)ほかに宿泊費等実費
宿泊地 片山津温泉

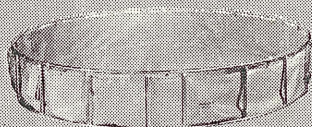


くわしいことは、代理店・支社・支店・出張所におたずねください。 (兼六園)

この夏は、キダープールで体力づくり!!



キダープール(A・B)



A

《組み立て式》 鉄枠は4つに分解でき、丈夫で軽く設置は簡単です。

- 排水管がついているので、排水にも便利です。
- 直径280cm、高さ45cm、ほこりよけのビニールカバーと整理袋つき。

38,000円



B

- 枠を硬質塩化ビニールにして安価にしました。
- 品質、寸法、その他(A)とかわりありません。

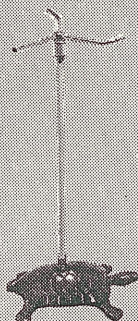
29,000円



魚つりセット

- プラスティック製
- 白・赤・黄・緑・青が各3尾(計15尾)
- 釣竿5本付

1セット 1,200円



キダー スプリンクラー

- 蛇口につなぐだけでOK
水圧で円形に回転します
- 高さ30cm〜130cmまで、5段に変化
- 鉄製、緑色の亀さんです

2,800円